

Think globally, Act locally

2019

6.9-6.15

China

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書



ACCUCU

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

北京市・雲南省・上海市

2019 年 6 月 9 日(日) — 6 月 15 日(土)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACC U)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに4千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは1千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日中間の国際交流事業としては、国際連合大学（UNU: United Nations University）の委託を受けて、文部科学省、中国教育部の協力のもとで国際教育交流事業「中国教職員招へいプログラム」が実施されました。2002 年から始まったプログラムを通して、これまでに延べ1,682名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、当初は10名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化35周年を記念する2007年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

今年度は、文部科学省委託事業「2019年度初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2019年6月9日から6月15日に実施された中国政府日本教職員派遣招へいプログラム（中国派遣プログラム）には、前年度に中国教職員の受け入れにご協力いただいた、また本年に中国教職員の受け入れにご協力いただく自治体や学校の教職員、日中間の教職員交流に高い関心を持ち、公募により選抜された教職員等、計25名が参加しました。

参加者は北京市で中国教育部による同国の教育事情や制度について説明を受けたのち、北京市、雲南省、上海市での教育行政機関、学校および世界遺産等の訪問を通して、中国の都市や地方における教育の現状と課題、訪問校の教育の特徴を学ぶとともに、中国の教職員ならびに児童生徒との交流を図りました。このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する関心を高め、理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、在中国日本国大使館、文部科学省、及び、中国教育国際交流協会、雲南省教育厅、上海教育国際交流協会、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2020 年 1 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目 次

1. プログラム概要	5
2. 実施内容・訪問記録	14
3. 成果と今後への活用	36
A グループ	37
B グループ	48
事業担当者コメント	59
付録 各訪問先での主な出席者	61
あいさつ（記念品贈呈）担当	63
記録係（担当箇所）	63
写真	64
過去のプログラム実績	68

1. プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、「戦争は人の心で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とするユネスコ（UNESCO: 国際連合教育科学文化機関）の理念に沿って、多様な文化が尊重される平和な社会の実現を使命として1971年に設立され、教育と文化の分野においてアジア・太平洋地域の連携・交流や持続可能な社会の実現を推進する団体としてさまざまな事業を展開してきました。子どもたち・学校・地域への波及効果が高い、学校の教職員を対象にした国際交流事業には2001年より携わり、「先生が変わる 子どもが変わる 未来が変わる 学びの場」づくりを担っています。

初等中等教育にかかる日中間の交流事業については、国際理解や友好親善のため、2002年より国際連合大学が文部科学省の協力のもと、ACCUを委託機関として「国際教育交流事業」の一環で中国教職員の招へいプログラムが実施されました。さらに、2003年に始まり、2007年からは中国政府の招へい事業に発展した日本教職員の中国派遣プログラムが毎年行われてきました。これらの事業は引き継がれ、このたびの「中国政府 日本教職員招へいプログラム（中国派遣プログラム）」は、文部科学省委託の初等中等教職員国際交流事業として日中間の交流や両国教職員の学び合いの機会をさらに深化させることを目指しています。

2. 本プログラムの目的

- (1) 中国の教育現場や文化を肌で感じ、理解を深めること
- (2) 中国との友好親善を促進すること
- (3) プログラム期間中の学びを児童生徒や学校、地域に伝えること
- (4) 将来の継続的な中国との交流のきっかけとすること

3. 期待される成果

- (1) 参加者が教育現場で国際理解を推進し、寛容で持続可能な社会の担い手となること
- (2) 参加者や参加者の所属先が中国との持続的な交流を育むこと
- (3) 参加者の価値観や行動が変容し、さまざまな問題や課題に主体的に取り組んでいくこと
- (4) 日中の教育の質が高まること

4. 活動内容

- (1) 〈日本にて〉中国の教育政策の現状と課題に関する講義を受講すること
- (2) 〈中国にて〉中国の教職員および児童生徒との教育現場で交流・意見交換すること
- (3) 〈中国にて〉学校および教育・文化施設を視察すること
- (4) 〈日本にて〉学びを各現場にて還元すること

5. 日程

出発前オリエンテーション：2019年6月8日（土）

プログラム実施期間：2019年6月9日（日）～6月15日（土）[7日間]

日付	日程	訪問先	活動
6月8日（土）	派遣前日 （午後）	東京都内	出発前オリエンテーション （中国の教育事情についての講義を含む）

6月9日（日）	第1日目	東京→北京市	東京（羽田）出発 北京首都国際空港到着
6月10日（月） ～ 6月14日（金）	第2日目 ～ 第6日目	北京市 雲南省 上海市	中国教育部表敬訪問 訪問先教育長教育委員会表敬訪問 学校訪問、教育・文化施設等見学
6月15日（土）	第7日目	上海市→日本	上海出発（成田・関西・福岡へ） 日本の各地へ到着

6. 参加者

下記の教職員、随行員、計 25 名程度の参加とする。

- ・ 2018 年度中国教職員招へいプログラムで受入実績のある教育委員会が推薦する教職員
- ・ 2019 年度中国教職員招へいプログラムで受入予定の教育委員会が推薦する教職員
- ・ 公募により選抜された、中国の教育や中国との交流に関心を寄せる自治体または学校の教職員
- ・ 文部科学省および ACCU の職員

7. 参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 過去に本プログラムに参加したことがないこと。
- (3) 所属先の教育長または学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。特に、在職 3 年～15 年程度の教員が望ましい（ただし、訪問団長・副団長はこれに限らない）。
- (4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- (6) プログラム期間中の学びを帰国後に児童生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
- (7) 将来にわたり中国との教育交流の推進に寄与できること（中国の教職員・児童生徒・学校・地域とのつながりを大切に、国際理解を推進する立場にある者が望ましい）。
- (8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って行動できること。
- (9) 訪問先は日本と習慣の異なる国であることを理解し、突然の変更などにも前向き且つ柔軟に対応できること。
- (10) 日本国内にて、E メールや電話にて円滑に連絡を取れること。
※参加決定後は、参加者本人に直接連絡いたします。
- (11) Microsoft Word/Excel などの簡単な操作ができ、所定のフォーマットに必要情報を入力し E メールで送信できること。
- (12) 帰国後に報告書の提出をすること。
- (13) 中国入国時（6 月 9 日）に 6 ヶ月以上の残存期間（有効期限）を満たす旅券を所持し、入国日 1 ヶ月前の指定された日までにその写しを提出すること。

8. 渡航費等諸経費

- (1) 中国政府が下記について負担する。
 - ・ 中国国内の移動に要する交通費
 - ・ 中国滞在中の宿泊、食事
※中国政府から中国滞在中の全ての食事が手配される。日当は支給されない。
 - ・ プログラムの運営に必要な経費（通訳等）
- (2) ACCU が下記について負担する。

- ・ 日本（往路：羽田、復路：成田・関西・福岡のうち最寄り空港）と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- ・ 日本国内交通費：オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額（ACCUの規程に準ずる）
- ・ オリエンテーション当日（6月2日）の宿泊
 - ①オリエンテーション当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日（6月1日）の宿泊費を支給する。
 - ②帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日（6月9日）の宿泊費を支給する。
 - ③本プログラムは公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先にて負担する。期間を通してACCUから日当は支給しない。

(3) 各参加者の負担

- ・ 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
- ・ 上記（1）、（2）以外の諸経費

(4) 旅券と査証について

- ・ 旅券：入国時に6ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- ・ 査証：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

プログラム期間中は、日本語－中国語間の通訳を中国政府が配置する。

10. その他

以下に関して、あらかじめ了承した上で参加申請すること。

- ・ オリエンテーションやプログラム期間中に撮影された写真等は、文部科学省、ACCU、中国教育部の作成する資料やホームページなどの紙・電子媒体で、随時使用、掲示・掲載される。
- ・ 参加者から提出される申請書類にある情報は、プログラム準備・運営のため、必要に応じて、文部科学省、在中国日本国大使館、中国教育部、中華人民共和国駐日本国大使館に共有される。
- ・ 本事業への参加後に、アンケート調査への協力依頼がなされる。

プログラム日程

日付	都市	時間	内容	宿泊先
6月8日 (土)	東京	13:40-13:55	集合&受付	アワーズイン阪急シングル館 東京都品川区大井 1-50-5
		14:00-18:05	オリエンテーション	
		18:05-18:20	チェックイン	
		18:30-20:30	懇親会	
		20:30-	ホテルへ	
6月9日 (日)	東京～ 北京	06:30	集合	江西大酒店 北京市豊台区東鉄匠営横一 条8号(近東鉄営橋)
		06:45	ホテル出発	
		09:05-12:05	羽田-北京 MU8740	
		12:05	北京到着	
		13:00-14:00	昼食	
		14:00-15:00	移動	
		15:00-16:30	天壇で文化体験	
		16:30-17:00	移動	
		17:00-17:30	ホテルチェックイン	
		18:00-19:30	夕食	
		20:00	ホテルへ	
6月10日 (月)	北京～ 昆明	07:30-08:00	朝食、チェックアウト	昆明威龍飯店 昆明市五華区沿河路42号
		08:00-08:40	移動	
		08:50-09:50	北京市東交民巷小学校	
		10:40-11:40	教育部訪問	
		11:50-13:00	昼食	
		13:00-14:00	移動	
		14:00	空港到着	
		15:55-19:20	北京-昆明 HU7111	
		19:40-21:00	ホテルチェックイン	
6月11日 (火)	昆明	07:30-08:30	朝食	
		08:40-09:20	移動	
		09:20-11:00	昆明市書林第一小学校訪問	
		11:10-12:00	移動	
		12:00-13:30	昼食	
		13:40-14:30	移動	
		14:30-17:00	昆明市芳草地国際学校訪問	
		17:00-17:40	移動	
		17:40-19:00	夕食	

			ホテルへ	
6月12日 (水)		06:50-07:50	朝食	
		08:00-09:30	移動	
		09:30-11:00	石林民族中学訪問	
		11:30-12:00	移動	
		12:00-13:00	昼食	
		13:00-13:30	移動	
		13:30-16:00	石林で文化体験	
		16:00-17:30	移動	
		17:30-19:00	夕食	
			ホテルへ	
6月13日 (木)		07:30-08:30	朝食	
		08:40-09:20	移動	
		09:30-11:00	昆明市盲啞学校訪問	
		11:10-11:50	移動	
		11:50-14:00	昼食	
		14:00-15:00	移動	
		15:00-16:30	雲南省教育庁訪問	
		16:30-17:30	移動	
		17:30-19:00	夕食	
			ホテルへ	
6月14日 (金)	昆明～ 上海	04:30-05:30	チェックアウト	上海緑地普陀智選假日酒店 上海市光復西路843号, 上海 200063
		05:30-06:30	移動	
		08:00-11:20	昆明-上海 MU5801	
		12:00-12:45	移動	
		12:45-13:30	昼食	
		13:30-14:00	チェックイン	
		14:00-14:30	移動	
		14:30-16:00	上海市甘泉外国語中学校訪問	
		16:00-16:30	移動	
		16:30-17:15	東方明珠で文化体験	
		17:15-19:00	夕食	
			ホテルへ	
6月15日 (土)	上海～ 羽田、 福岡、 関西	08:30-08:40	ホテル チェックアウト	
		08:40-09:45	移動	
		09:45-10:45	川沙老街で文化体験	
		10:45-11:00	移動	

		13:05-16:45	MU539 浦東-羽田	
		14:10-17:15	MU5087 浦東-福岡	
		14:45-18:30	MU9821 浦東-関西	

【オリエンテーション講師】

文部科学省総合教育政策局調査企画課外国調査第二係 係長 新井 聡
 文部科学省大臣官房国際課 海外協力官 荒井 忠行

【中国側随行者・通訳】

北京 随行および通訳：
 中国教育国際交流協会 プログラム・オフィサー 林 穎

北京・雲南省・上海 随行および通訳：
 中国教育国際交流協会 プログラム・アシスタント 羅 江

雲南省 随行：
 雲南省教育庁 教育対外交流センター 馮 晶晶

上海 随行および通訳：
 上海教育国際交流協会 プロジェクト・オフィサー 朱 家儀

参加者リスト

A グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
A-01	高橋 勝也	名古屋経済大学	准教授	団長
A-02	赤松 潤子	兵庫県立川西明峰高等学校	教頭	記録係
A-03	井田 志帆	横浜州市市場小学校	教諭	記録係
A-04	岩井 香奈	筑波大学附属坂戸高等学校	教諭	庶務係
A-05	岩渕 慎	渋谷教育学園幕張中学校・高等学校	社会科主任	写真係
A-06	大野 優子	千葉県立千葉盲学校	教諭	文化交流係
A-07	尾形 順子	宮城県気仙沼市立鹿折小学校	教諭	記録係
A-08	小野寺 裕史	気仙沼市教育委員会	副参事 (指導主事)	記録係
A-09	熊谷 茂之	さいたま市立春野中学校	教諭	記録係
A-10	宮崎 紀子	大牟田市立明治小学校	主幹教諭	進行係
A-11	渡辺 道治	札幌市立屯田西小学校	教諭	記念品係
A-12	伊藤 妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	プログラム・ スペシャリスト	
A-13	荒井 忠行	文部科学省大臣官房国際課	海外協力官	

B グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
B-01	川崎 由美子	大牟田市立大正小学校	教頭	副団長
B-02	泉 裕子	横浜市立日枝小学校	主幹教諭	文化交流係
B-03	牛坂 留都	埼玉県立常盤高等学校	教諭	写真係
B-04	梅枝 駿	セントヨゼフ女子学園高等学校・中学校	教諭	記録係
B-05	昆野 玄	気仙沼市立面瀬小学校	教諭	記録係
B-06	笹村 洋子	秋田県北秋田市立鷹巣小学校	教諭	記録係
B-07	下地 徹	大牟田市立みなと小学校	主幹教諭	記録係
B-08	寺阪 多江	和歌山県立古佐田丘中学校	教諭	記録係
B-09	藤田 有記	熊野町立熊野第一小学校	主幹教諭	記録係
B-10	松山 俊治郎	学校法人松商学園 松本秀峰中等教育学校	教諭	記念品係
B-11	宮腰 卓秀	北海道札幌国際情報高等学校	教諭	進行係
B-12	天満 実嘉	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	プログラム・ オフィサー	

プログラム関係機関

<日本側機関>

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

在中華人民共和国日本国大使館/Embassy of Japan in China

在上海日本国総領事館/Consulate-General of Japan at Shanghai

<中国側機関>

中国教育部/Ministry of Education, People's Republic of China

中華人民共和国在日本国大使館/Embassy of the People's Republic of China in Japan

中国教育国際交流協会/China Education Association for International Exchange

雲南省教育庁/Education Department of Yunnan

上海教育国際交流協会/International Education Association Shanghai

<訪問校>

北京市東交民巷小学校/

Dongjiaominxiang Primary School

昆明市書林第一小学校/

Kunming Shulin Primary School

昆明市西山芳草地国際学校/

Fangcaodi International School, Kunming Xishan Campus

石林民族中学校/

Shilin Nationality's Middle School

昆明市盲啞学校/

Kunming Municipal School for the Blind and Deaf

上海市甘泉外国語中学校/

Shanghai Ganquan Foreign Languages Middle School

<企画・実施・運営>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

2. 実施内容・訪問記録

6月8日(土)午後 オリエンテーション(東京)

訪日前に、東京にあるアワーズイン阪急の会議室にてオリエンテーションが実施された。

文部科学省大臣官房国際課海外協力官 荒井忠行氏、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター部長 進藤由美、訪問団団長名古屋経済大学准教授 高橋勝也氏、副団長大牟田市立大正小学校教頭 川崎由美子氏よりあいさつがあった。

続いて、同荒井氏より日本の教育行政について、文部科学省総合教育政策局調査企画課外国調査第二係係長 新井聡氏より「中国の教育事情について」というテーマで講義が行われた。

自国の教育をあらためて俯瞰することに加え、中国の教育事情のポイントが多様に盛り込まれており、訪中後の質疑応答を見据えた内容であった。

その後、ACCU職員による自己紹介アクティビティーや注意事項の説明に続き、中国での文化交流のために参加者全員で「どんぱん節」(盆踊り)の練習をした。短い時間で互いに知り合い、訪中に向けて準備した。



文部科学省職員(左)から中国語による
あいさつの手解きを受ける様子

プログラム参加者の参加目的(抜粋)

- ・学校として取り組んできた海外との交流で、アジア各国との交流を広げ深めるため。
- ・自校に多く在籍する中国につながる児童が自らを表現できるような支援のヒントを得て、日本人児童との親密関係を構築する環境を整えるため。
- ・中国の教育における良さとその根拠を探り、自身の国際理解を深め、児童生徒や教職員に伝えるだけでなく、市のESDの充実や発展に生かすため。
- ・中国の生徒が母国の紹介をした際に、多くの生徒の興味関心を引き出ししており、経験に裏付けされた言葉が聞き手の理解を深めることを学んだ。自分自身が実体験に基づいて授業実践することの重要性を痛感し、それが責務であることを実感したため。

プログラム参加者の興味・関心(抜粋)

- | | |
|--------------------|---------------------|
| ・教育格差への対応・方針 | ・健康管理や精神的に落ち込む生徒の対応 |
| ・STEM教育の推進 | ・授業や職員室でのICT活用状況 |
| ・特別支援教育における重点政策と課題 | ・外国籍児童への対応や制度 |
| ・教員と児童や保護者の関係性 | ・グローバル化への対応策 |
| ・生徒指導上の諸問題 | ・母国語や外国語教育の状況 |

講義のQ&A(抜粋)

Q: いじめや不登校といったことに対する生徒指導面において、中国で抱える問題や対応は?

A: 中国ではいじめに関する政策は進んでおらず、現在模索中であるので、日本の取り組みを参考にしたいと考えているはずである。

Q: 飛び級はどの場合に認められるのか?

A: 学業の成績において優秀で、自分の学年では物足りない場合に、保護者の申請により、一年の飛び級が可能になる。

Q: 課外活動が盛んであるということだが、教員が指導するのか？または外部の方が指導するのか？

A: 教員が行う場合もあるし、外部人材が行う場合もある。学校ごとに予算を組めるので、外部人材を雇うことができる。基本的に教員は教育の専門職員であるので、それ以外の学校の活動は外部委託で対応する（給食職員や保安院を含め）。ただ、上海の事例であるが、地方から出稼ぎのために上海で暮らす家庭の子どもが通う学校では、学業より課外活動を重視している。課外活動を通して上海に溶け込むようにしている。例えば、各地方の言語を修正して上海の生活になじむようにしている。ここでは各教員が率先して課外活動を担当し、生徒と連携して自身の能力を発揮している。

Q: 教員の養成は資格試験によるのか、師範学校のような機関を必ず卒業しなくてはならないのか？

A: 資格試験である。教科担任制であるので、普通大学でも教科に関連することを勉強し試験に合格すれば教員になれる。

Q: 教員の地位はどうだろうか？日本では、昔は「先生の言うことをよくきいてね…」というような状況が変わってきているが、中国の状況はどうか知りたい。

A: 地位は高い。以前は資格がない人が教師になって教えたりすることがあったが、今は資格が高くなっており、大学学部卒業以上となっている。

講義の補足

訪日の直前である2019年5月28日に神奈川県川崎市でスクールバスを待つ児童多数が犠牲になった痛ましい事件を受け、文部科学省の新井氏より中国の教育事情に加え学校安全についても説明があり、上海にある華東師範大学附属小学校の取り組みが紹介された。

その学校には校門に保安員が2～3名、24時間体制で常駐している。子どもは保護者に連れられて登校するが、その際には校門付近で保護者のボランティア、管理職の教員、上級学年の生徒が並んでいて、人の目がつくように配慮している。校門より外は警察の管轄であり、門より少し離れた場所で子どもを見守っている。また、地域の人にわかるように、学校は学校内の安全管理の分担について掲示している。そこには校長の名前や連絡先、所管の派出所の連絡先が明示しており、何かあったときに連絡できるように配慮されている。

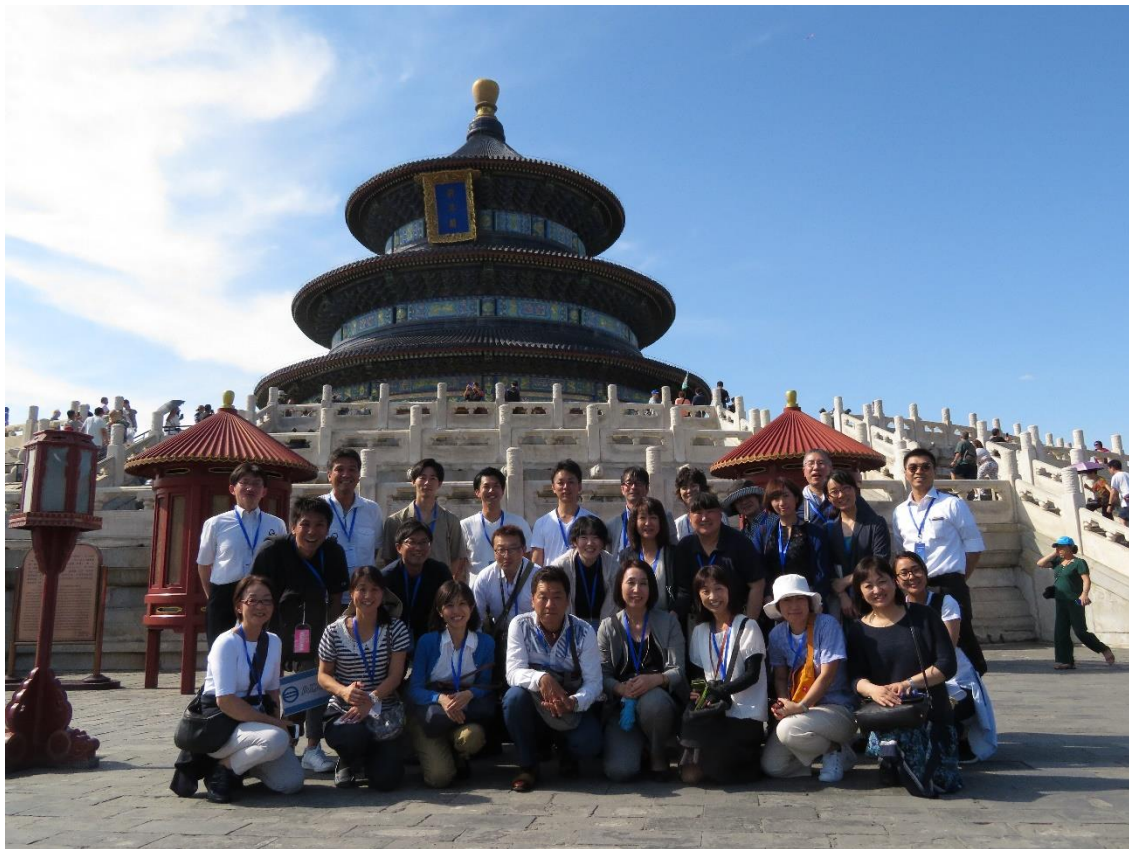
さらに、コミュニティとの連携で、朝6:00～7:00、夕方18:30～20:30の間校庭を開放し、地域の人が運動できる環境を整えているが、その際の鍵の管理は前述の保安員が行い、安全に気を付けている。

6月9日（日）北京到着・天壇公園

6月9日（日）に日本を出発した訪問団は、天気のよい青空の北京に無事到着した。

最初に訪れたのは明の時代に建てられ、1998年にユネスコの世界遺産に登録された天壇公園。ガイドさんによると、敷地面積が約 230 万㎡あり、その中にある「祈年殿」はかつて皇帝が豊作を願って天に祈りを捧げた場所で、天壇公園の見どころである。1420年に建てられて以来、改造や増築、修復が重ねられ、現在の姿になっている。天壇公園の中にある建築物に使われている青色、緑色は、それぞれ「天」の色、「庶民」の色として表現されているそう。また、階段や建物の中でよく目にする龍は皇帝を意味する。「祈年殿」の中には28本の柱があり、釘は使われていない。また、その柱は内側に4本、その周りに12本、さらにその周りに12本配置されており、それぞれ「四季」「時刻」「月」を表している。

世界遺産ということもあり、多くの観光客を目にする一方、この4月から60歳以上は入場料が無料となり、地元の年配者が憩いの場として利用し、トランプやボードゲームを楽しむ姿もみられた。開放感のある広い空間にそびえたつ美しい建造物がよく映え、天と人がつながる場所としての厳かなたたずまいを残しつつ、その中で街の人々の息づかいも感じられる。中国の歴史と生活、大きさと大らかさを兼ね備えた場所であった。



祈念殿を背景に記念撮影

6月10日（月）北京市東交民巷小学校

北京市東交民巷小学校は、1955年に設立され、児童生徒数は1400名以上、教職員は128名（平均年齢43歳）いる。同じ区に2つ、少し離れた場所に1つ分校がある。学校理念は「勤勉、礼儀、団結、活発」の4つで、この理念を実現するために家庭も含め実践している。また、太陽の光のように温かくしみわたるようにという願いが込められた「陽光教育」にも取り組んでいる。授業の特色は、国・地方・学校の3段階に分かれ、国や地方が設定する授業が多数を占め、学校の授業は週1時間である。必修と選択の形式があり、毎年授業内容をwebで公開している。生徒は授業以外にサークル活動（芸術、体育、伝統文化）に参加できる。生徒自らサークルをつくることもできる。学校と家庭が協議して24条の子どもの規範を決め、1年で4つ規範を、6年間で24の良い習慣を身に付けられるようになっている。優秀な成績を修めたら、星のバッジが生徒に贈呈され、達成感を味わえるようにしている。

訪問内容

1. 教職員による歓迎
2. 学校説明（王文利校長による）
3. 授業見学（学校が設定した授業）
 - ・4つのグループに分かれて見学
 - ・理科（生徒が2人一組で電流の実験）
 - ・書道
4. 施設見学
 - ・学習の成果物が展示されている
 - ・各教室に大型テレビモニターが設置されている



理科の授業の様子

質疑応答（抜粋）

Q:環境教育を行っているか。

A:テーマ（水・電気・ゴミの分別等）に分けて、節約意識を養うようにしている。例えば、家庭の水の消費量を調べ、授業で発表し話し合う。また、4月には植栽活動をした。

Q:生徒の視野を広げるために、海外の文学作品を扱っていると聞いた。どの国のどの文学作品を扱っているか。また、徳育について、細かく指導していると聞いた。具体的にはどのような取り組みをしているのか。

A:国の定めた授業で、海外の文学を学ぶ授業があり、実践している。「本の香り」のするような学校を目指している。徳育については、学校の理念を実践することを重視しているので、その理念に対する100の物語をつくって教えている。校庭のシンボルである木をつかった「木の下」という物語では、その中で語られるさまざまな状況の中で、子どもに考えさせ、判断させるようにしている。

6月10日（月）中国教育部表敬訪問

中国教育部は、中華人民共和国の中央政府として教育全般を統括している。日本の文部科学省にあたる。教育部では全国的な方針、施策、制度、基準を定めており、各行政レベル（省、自治区、直轄地）において、各地域の状況に応じて柔軟に取り組んでいる。初等中等教育における機関の設置や運営は、地方の裁量に任せられ、その土地や環境に即して対応することになっている。

（教育調査 第150集 文部科学省「諸外国の初等中等教育」より）

中国の教育に関する説明

基礎教育局副局長 俞偉躍氏より次のとおり説明があった。

1. 現状について

中国の初等中等教育は国務院の指導により、省、自治区、県などで実施されている。就業年数は、小学校6年、中学校、3年、高等学校3年の6-3-3制である。全国には約50万校、学生の総数は2.2億人、1,418万人の教員が働いている。幼稚園を含む小中学校は義務教育であり、1986年から25年かけて、義務教育の普及を進め、現在の入学率は、小学校99.95%、中学校100%、高等学校88.8%、幼稚園約81%、体の不自由な子は90%に達している。



中国教育部関係者（右側）との意見交換

2. 教育の均一化について

中国では教育の公平化を重視しており、都市と地方の格差を縮めるために均一化に取り組み、学校建設においても、全国的に経費を定める基準を同じにしている。貧困地域の生活が苦しい家庭に対しては、学費や雑費、本などの費用を補助している。農村の教育にも力を入れており、2018年の教育予算3067億円のうち、80%は農村に配分され、またその4分の1は貧困地域に充当されている。これらの政策により、義務教育の弱いところを補っている。さらに、地方の教員育成にも力を入れ、2015年から新しいプロジェクトが開始されており、優秀な人材が農村で教えられるように育成している。宿舎の確保を含め、教員に対する手当も充実させている。国レベルの研修も実施し、2016年には360万人の農村教員が参加した。

3. 高校の改革について

2014年から全面的に質の改革を行っている。まず、生徒が選択できる科目を設置した。また、生徒は違う学年の授業にも参加できるようにした。大学入試科目が高校の教科と関連することを踏まえ、生徒の全面的な成長を促進するため、数字による評価を変え、総合的な素質を大学入試の評価に含めた。よって、道徳、知力、体力において総合的な成長促進が可能のように設計した。2017年には授業改革案を策定し、履修登録制を取り入れるなど、生徒の障がいや人生の選択能力を養えるようにしている。

4. 特殊教育について

日本の特別支援教育にあたる中国での特殊教育において、教育体制の完備および教育能力を高めることを重点においている。中国では障がい者の数は多いが、国の政策はまだ途上である。特殊教育に携わる教員の条件や環境を整え、授業の内容を工夫するなどして質を高めるよう努

めている。加えて、特殊教育を普及させるため、中度の障がい児は普通教育、重度の場合には特殊教育、多重またはきわめて重度であれば家庭で教育するようにしている。

5. 学生の評価

生徒の基礎能力を高めるため、高校では試験を行い、学力を測っている。これは国の基準によって実施され、試験では国が設定した科目が重視されている。

質疑応答(抜粋)

Q: 中国では小学 3 年生から英語教育が始まっており、日本では来年度から同様に実施される予定である。中国では専科の先生が指導しているということもあわせて聞いているが、どのように英語教育を導入し、どのような教員研修をしたのか知りたい。

A: 状況としては、小学校 3 年生から英語を教えることが多いが、大都市では小学 1 年または幼稚園から英語教育を開始することがあり、低年齢化している。研修は、国の規定により 5 年間で 360 時間受けることになっている。教材についても、学校や学科別など、特別に設計されている。

Q: 日本では若手教員の増加で、研修の必要性が求められている。中国での学校レベルまたは国以外の研修があれば教えてほしい。

A: 教員の質は教育の質を決めるため、教員のレベルはとても重要である。教員の待遇は地方公務員レベル相当としている。貧困地域においては特別な支援もしている。教員が幸福感や誇りをもって教職に従事できるように取り組んでいる。国、省、県レベルで研修があり、省や県では教員の需要に応じて、特別経費が設けられている。教員に対する道徳的な評価も定められており、条件を満たさなければ教員としての資格を得られない。

Q: 自閉症や発達障がいをもつ生徒の普通学級における対応はどのようにしているか。

A: 自閉症や発達障がいをもつ子どもは中国で増えてきた。軽度の場合には普通学級で一緒に学ぶ。教員研修においては、自閉症の子を教えることも組み込まれている。徳育の授業では、生徒に融合の理念を教えている。

Q: 大学入試について教えてほしい。

A: もともと文系と理系に分かれていた。しかしながら、社会の発展とグローバル化により文理を分けることは望ましくないと考えている。2014 年の改革では、生徒による自由選択の幅を広げた。基本的にはすべての科目について学力試験が実施されるが、その上で生徒が選択できるようになっており、趣味や自分自身が伸ばしたい長所に応じて選べるようになっている。大学入試においても、選択により受けられる科目がある。例えば、物理系の大学に入学したい場合には、高校の卒業試験で物理を受ける。

Q: 教科書は無償で配付しているのか。

A: 義務教育期間の 9 年間は無料で配る。

Q: 古典教育はどのようにしているのか。日本では李白の詩を教えたりしているが、中国ではどうだろうか。

A: 多くの学校で、古典(国語)や徳育の時間に教育している。古典の詩や文章を読むことを指導している。また、音楽、徳育、体育の時間には昔のことや伝統文化について教えている。

6月11日（火）昆明市書林第一小学校

昆明市書林第一小学校は1911年に設立され、100年近い歴史があり、昆明市で一番広い学校である。2013年には他の学校と併合し市内より移転した。児童生徒数は約2,700名、教職員は146名である。6学年で47クラス(班)あり、1～3年生は各9クラス、4～5年生は各8クラス、6年生は4クラスで、1クラスは55～67人の児童生徒数で構成されている。教員の平均年齢は40歳である。人びとが満足する教育を目指し、住民の人气があり、



タブレットを使用した音読・朗読の時間

認められている学校である。民族の多様性を大切にしており、毎週金曜日は生徒が自分の民族衣装で登校する。お互いの文化紹介を各クラスのミーティングで行う。校長の王瑤氏は40年学校に勤務し、校長になって23年目のベテラン教員である。

訪問内容

1. 学校・授業見学

・普通授業(理科と音読・朗読)

理科:魚の呼吸の様子を観察

音読・朗読:生徒ひとりひとりがタブレット1台を使用し、音読

・選択授業

刺繍、書道、プログラミング、囲碁、卓球、サッカー、バスケット、音楽、テニス、舞蹈

2. 学校説明(王瑤校長による)

3. 意見交換会

質疑応答(抜粋)

Q:優れた学習環境に驚いた。学校の一年間の教育予算が知りたい。また、教育部によると教育の均一化に取り組んでいるということだが、近隣の学校との予算に差はないのだろうか。

A:予算は年間250万～350万元である。本校はもともと市内にあったが、2つの学校が合併して現在の地に移転した。教育資源の強い学校が弱い学校を強めていこうとする傾向がある。特に雲南省は山の中の小学校など貧困地域が偏っている。

Q:日本では、早寝早起きの習慣を身に付けるのに家庭環境を重要視しているが、この学校では家庭との取り組みはあるか。

A:そのような習慣は家族が教えることが大切である。ここでも、学校・家庭・地域が連携して取り組んでいる。

Q:教員は希望すればこの学校に採用されるのか。また、子どもは希望すればこの学校に入学できるのか。

A:教員は採用試験(筆記と面接)がある。募集はWebを通して実施される。入学に関しては、学区

の中で希望すれば可能である。地域格差を縮めるために、学区の規模に応じて入学者数が決められている。

Q:子どもが友好的で礼儀正しい。書道など魅力的な選択科目があるが、学校の方針としてどのような子どもを育てたいと考えているのか。

A:知力、体力、美術、努力など全面的な教育で子どもたちを育みたいと考えている。学校は15:30に授業は終了するが、保護者の仕事がまだ終わっていない時間なので、15:30からは選択授業としてサークル活動のような取り組みをしている。このような時間に道徳的な子どもを育てたいと思っている。教員が指導しているが、外部の指導者の配置もある。

Q:日本の普通学級には特別支援が必要な子どもが1~2割いて、教員はこの対応のための研修で苦勞している現状である。こちらの学校では一クラス55人の子どもを指導していることに驚いた。特別支援が必要な子どもがいたらどのように対応するのか。

A:この学校では特別支援が必要な場合は外部の力を借りている。ただ、子どもを一律に教えるのではなく、ひとりひとりに合わせて教育するのが基本であるという方針で進めている。

6月11日（火）昆明市芳草地国际学校

昆明市芳草地国际学校は、国内外で高い名声を得ている北京にある芳草地国际学校の分校である。中国の文化歴史を理解するだけでなく国際的な視野をもった子どもを育成している。中国のみならず外国につながる子どもも通っている。外国人の教師も教えている。現在、中国語と英語ができないロシアやカザフスタンの児童4人が2ヶ月間中国語を学ぶクラスに在籍しており、学校で開発した教材を利用している。校門からすぐの校舎の入口には5年生の楊



小学5年生楊さん（右）の絵画作品展（学校の入口付近）

さんが描いた絵がたくさん展示されていた。有名な画家の絵を見て、美しさの瞬間を切り取りたいと思い、絵を描くようになったそうだ。校長先生が期待する生徒の一人である。

訪問内容

1. 校内・授業見学

- ・普通授業（李白の作品音読・朗読）
- ・廊下（児童生徒の作品展示）
- ・ステージを備えたホール（座席照明装置付）
- ・児童6人による瓢箪笛と呼ばれる民族楽器の演奏

2. 交流会・意見交換会

意見交換会の内容（概要）

（1）昆明市芳草地国际学校校長 張宏氏 より説明

この交流会・意見交換会には昆明市にある5つの区のうちの一つ（西山区）の学校の校長が参加している。昆明市芳草地国际学校は1956年設立にされた。授業は、中国の国家課程による11科目があり、1時間は40分で、毎日8:30～15:15の時間帯で実施され、15:15～17:30は選択授業の時間である。また、国家課程に基づく芳草課程では学校独自の課程を開発している。その芳草課程の言語分野について説明がなされた。外国につながる子どもが受講する中国語の授業では、学校独自に開発した教材を使用している。児童生徒のレベルによってクラス編成されており、現在4人いる初級クラスは張校長が受け持っている。言語の他にも、刺繍、切り紙、書道、京劇、篆刻や民族の踊りを含む、文化についても教えている。また、国家文化週間が設けられ、各国の文化を体験的・実践的に学ぶ機会もある。

（2）昆明市書林第二小学校校長 嚴冰氏 より説明

書林第一小学校を含め、前身は書林小学校であった。書林第二小学校は2つのコースおよび48のクラスがある。教育課程の理念は「体験」と「実践」であり、教育精神としては、初心を貫徹し、命を大切にすることである。また、学校の課程内容は、德育、学科、総合実践に分けて、生徒の全面的な発展を目指すように組んでいる。課程の実践においては、生徒の興味によって長期または短期課程を選べるようになっている。「三大典礼」においては、儀式的教育として、始業式・終業式・卒業式で実践的に学ぶようになっている。加えて、「三大活動」の一つとして、

中国で有名な、たくさんの人を助けた雷鋒さんに学ぶ活動をしている。さらに、雷鋒銀行と呼ぶ取り組みでは、子どもたちの活動を記録している。例えば、児童生徒が古い本やおもちゃなどを交換して新しい本やおもちゃの主を探し、ものの価値を認識させるよう教えている。教育課程の評価については、基準の設定・実施・管理において、保護者から意見を集め、民主的な政治意識を高める。そして、自己評価、相互評価（生徒同士）、教師による評価、家族による評価等、多様に評価する体制を整えている。

(3) 日本訪問団 団長 高橋勝也氏より説明

「教育が日本の社会をリードする」の主題で発表がなされた。日本の教育は現在大きな変革期にあり、社会の変化に対応している。小学校では変化が著しく、プログラミング教育、英語教育、道徳の教科化により、IT社会やAI、グローバル化、豊かなこころの育成に取り組んでいる。また、中学校や高等学校ではIT機器が導入され、教室では先生による一方的な授業ではなく、「主体的・対話的で深い学び」が実践され、生徒が主体的に能動的に学び続けられる力を身に付けられるように工夫されている。ただ、これは大学の入学試験のあり方と関わるため、これまで教育改革や授業改善における大きな障がいであったが、暗記に頼る教育からの脱却が図られ、その大学入試に変化がみられるようになった。このような変化に対応するために、日本の教職員は奮闘を続けており、夜遅くまで学校に残っていることも多い。また、教職員に掛かる負担を軽減するための努力も続いている。この場にいる教職員は日本のトップランナーである。日本と中国の友好、協力関係を密にして、両国の子供たちが共に発展していくことを祈っている。

(4) 日本訪問団 副団長 川崎由美子氏より説明

福岡県大牟田市は、世界遺産があり（三池炭鉱跡）、すべての小学校・中学校・特別支援学校が2012年にユネスコスクールに加盟した。勤務校である大牟田市立大正小学校は「福祉」「防災」「世界遺産」をテーマにまちづくりを進めるESDに取り組んでいる。①フラワータウンプロジェクトは子どもたちが、訪れる人をあたたかく迎えたいという思いから、地域の人びととともに校外で花を植えたり、育てたりしている。②防災プロジェクトは地域の特徴をよく知り、災害時に身を守り、安全に避難できるようにするため、防災に関するカルタを作って遊び、非常食を食べるなどの体験活動を通して学んでいる。また、地域の人たちと協力して何ができるかを考えている。③世界遺産学習では、大牟田市のまちの様子や歴史をしらべ、新聞にまとめている。新聞は駅で配付している。また、修学旅行を通じて、世界遺産をテーマに長崎の学校と交流をしている。これからは、持続可能な社会のために何ができるかを自ら考えさせ、自分の地域を誇りにもち、グローバル化を視野に入れ、誰とでも協力していけるような子どもを育成したい。

質疑応答(抜粋)

Q:教育課程の重点は、だれがどのように決めているのか。

A:まず国の目標(5つ)が大切である。そして国からの要請がある。その目標を果たす手段が授業である。国、省、学校が設定する3種類の授業がある。科目数が90と多いので、学校でどのように実施するかを検討する。現在は3種類の授業を6つの領域に分けて実施している。授業でどのように実践するかは、各教員が考えておこなう。よって、教員は国、省、学校、それぞれの目標を自らの専門科目の中で実践する力が求められる。

Q:(書林第二小学校校長からの質問)日本の道徳の授業の進め方は?

A:年間35時間で実施することは決まっていたが、教科化することにより、一層力を入れて取り組ん

でいくことになった。35 時間の中で、資料を読んだり、体験的な活動を通じて、「親切、環境、自然、家族…」などの内容項目をひとつひとつ取り組む。

Q: 徳育の授業で「雷峰さん」に学ぶとはどんなことか。「雷峰さん」とはどんな人なのか。他にどんな地域の偉人に学ぶ事例があるのか。

A: 全国的に知られている人物で、よい行いをして人を助け、仕事に命をかけていた。毛沢東氏は3月5日を「雷峰さん」を学ぶ日に設定し、これにより人口に膾炙することになった。雷峰少年隊を組織し、優秀な人材が人を助ける精神を身に付け、雷峰の徳行を学ぶ活動をしている。この精神を教えるための研究はまだ必要である。書林第二小学校では、よいことの記録を蓄積し、紹介している。例えば、新聞を売りそのおかねを寄付する活動も実践している。ソーシャルメディア(SNS)を使い、子どもたちの雷峰的な活動を広報することで、人を助ける気持ちを広めている。

Q: 学校の年間予算はどのくらいか。

A: 一人当たり 1095 元。国の教育予算は GDP の 4%に達している。もし、学校で工事する場合には、その分を加算してもらえる。

Q: 国際学校の入学試験はどのように実施するのか。

A: 公立なので、西山区の中で就学年齢に達していれば、入学可能である。ただし、非中国籍の児童生徒からの授業料を徴収している。

Q: 佐藤学(※)の例があったが、中国では日本の教育者や研究者を参考にするのか。

A: 日本のみならず各国のよい教育は取り入れている。日本の教育では防災教育や技術家庭を学ぶことが多い。

※日本の教育学者。現在、学習院大学文学部特任教授・東京大学名誉教授。

6月12日（水）石林民族中学

石林民族中学は1937年に張冲氏によって創立され、現在は雲南省から指定を受けている公立の民族学校である（全寮制）。生徒数は2,089名、教職員数は約150名である。2度の建て直しと引っ越しを経て、現在の場所に建てられた。中学校における少数民族比率は、石林の全住民における少数民族の割合と同じ37パーセントで、26ある少数民族からすべての民族の子どもが在籍している。雲法過程という少数民族の伝統の踊りや歌、刺繍、絵画などを取り入れた独自の授業を行っている。203の地域の学区を受け入れている。



日本訪問団と生徒が輪になって踊る様子

訪問内容

1. 文化交流

- ・イ族の踊り「男の太鼓」（男子生徒）
- ・イ族の月琴の演奏（女子生徒）
- ・狩りの踊り（男子生徒）
- ・イ族の祭りの踊り（男女混合）
- ・日本教職員による「ふるさと」「糸」の合唱、「ドンパン節」
- ・イ族の伝統舞踊

2. 施設・授業見学

- ・学校の展示室
- ・「農民科」と「刺繍」の授業

3. 教職員・生徒との交流

質疑応答(抜粋)

Q: (生徒からの質問) 日本で最も楽しいところはどこか。

A: 高校生が楽しいと感じるのはディズニーランド。あとは日本には寺や神社なども多く、おすすめしたい。心を落ち着けるためによく行っている。

Q: 踊りや刺繍などの民族の伝統文化は家庭で学ぶ方が多いのか、学校で学ぶことが多いのか。

A: 家庭で学ぶことの方が多い。

Q: (民族中学の教員からの質問) 日本の高校の授業は、勉強か技能か趣味が中心か。

A: 日本には色々な種類の高校がある。大学進学をめざす学校（スポーツを含む）、工業、農業、看護などがある。そして、趣味をするという意味で、授業が終わって、部活動がある。

Q: (民族中学の教員からの質問) 日本では高校を卒業してどのくらいの生徒が大学に進学するか。

A: 大学には7割ぐらいが進学する。女子も5割ぐらいである。

Q: 中国で流行っていることはなにか。勤務校の 6 年生児童がぜひ質問したいと言っていた。

A: アニメ(ドラえもん、ドラゴンボール、サスケ・ワンピース・Naruto)。写真が好き。

Q: 日本に行ってみたいか。その理由は。

A: (多くの生徒が挙手) 富士山に興味がある。アニメの勉強をしたい。花火大会を見たい。(特定のアニメソングを歌唱して) アニメの声優になりたい。スカイツリーではなく東京タワーが見たい。コスプレが好き。

Q: (生徒からの質問) 日本でおいしいものはどこにありますか。

A: (日本教職員 1) 日本中にある。

(日本教職員 2) 広島にはこんな料理がある。(お好み焼きの写真を見せながら)

6月12日（水）石林見学

2007年に中国南方カルスト群としてユネスコ世界遺産登録された。古生代後期にできたカルスト地形で、無数の石峰が林のように連なる「石林風景名勝区」が有名である。ヒマラヤ山脈の造山活動による地殻変動で石灰岩層が隆起して陸地となり、数千年に及ぶ風雨によって現在の石峰、石柱、石壁などがつくりだされた。自然が生んだ芸術といわれる、石柱に代表される奇観が特徴である。訪問団一行は、園内のカートに乗り、散策を開始した。民族衣装をレンタルし、雲南省の伝統文化に触れる経験もした。散策途中では民族楽器を奏でるイ族の男性2人に会い、民族衣装を着た2人の女性とともに民族舞踊を楽しむこともできた。また、石林散策では、海外の旅行客が多く、中国のグローバル化と観光産業の発展を肌で感じた経験であった。



6 月 13 日（水）昆明市盲啞学校

昆明市盲啞学校は 1922 年創立され、64 校ある特別支援学校の中で、一番大きい学校で歴史が長い。生徒数 433 名、教職員数 106 名の特別支援学校である。7 歳から高校卒業まで教育費は無償である。男女ともに寮生活を送っており、男子楼、女子楼がある。1、2 階で聾の生徒、3、4 階で盲の生徒が生活している。中国政府や雲南省から多くの支援を得て運営している。中国全体としても特別支援教育は、発展してきている。雲南省は、中国の中で政治、経済が遅れており、中～下のレベルになる。ただ、ここ数年、海外との交流は増え、アメリカや東南アジアの特別支援学校との交流が盛んである。昆明市盲啞学校では就学前のリハビリ、義務教育、職業教育、高等教育を組み込んで教育している。小学部では義務教育を中心に、中学部より後は、職業教育に力を入れている。職業教育では、美容、マッサージ、ネイル、料理、絵画、刺繍、表装などの技術を身につけることができる。また、生徒には、国を愛し、郷里を愛することを教えている。訪問時は、校舎が工事中であり、施設の整備が進められている。



聴覚障害をもつ生徒による踊り

訪問内容

1. 施設及び授業見学

- ・盲学級（中国漢方、針、身体の筋のなど、技術を学ぶ専門授業）
- ・聾学級（発話の授業）
- ・「表装」の授業（100 周年の記念誌の表装作業）
- ・全体体育（運動場での体操、雲南省の 4 つ民族の動きを取り入れた表現、千手観音の踊り）

2. 意見交換

質疑応答(抜粋)

Q: 手話と点字の生徒がどのように意思疎通を図っているのか。

A: あまり交流できていないが、軽度の生徒は交流できる。視覚と聴覚障がいの子どもの食堂を分けている。条例では、視覚と聴覚障がいの子どものを分けて教育することになっているが、まだ実現していない。

Q: 卒業後の主な就職先はどこか。

A: 就職率は 100 %である。視覚障がいの生徒はあんま、鍼灸など保健関係に就職する。聴覚障がいの生徒は、美術品や刺繍など手作業の業種へ。中国政府は障がい者を生活や雇用の面で支える方針を掲げている。また中国では、企業の障害者の雇用比率を 2%と定めており、それを満たせない場合には、1 人当たり 6 万元（日本円にして約 96 万円）を支払わなければならない。一方で、障がい者を雇用すると免税される政策もある。

Q: 中国のカリキュラムは普通学校と同様に、国・省・学校 3 つのレベルで編成されているのか。

A: 特別支援教育の中に国の基準があり、国の定めた教材を利用している。聴覚障がいをもつ生徒

で話せる(聞こえる)場合は、普通学級の子どもがつかう教材を使う。教育対象によって教材も違う。地方が定めた教材は地方の文化や習慣等を学ぶものである。

Q: 20 万円くらいする高額な補聴器 をつけている生徒もいたが、国からの支援はどの程度であるか。

A: 国からの補助は80%で、20%は自費となっている。人工耳殻は、国から補助がある。

Q: 卒業生が、貴校の教員になることはあるか。

A: この学校を卒業して本校の教員になった卒業生は5人いる。高等教育を受けた60%の生徒は職業学校に進学する。残り40%の生徒は大学に進学し、進学率は100%である。そのうち、SやAランクに分類される一流大学に入学する生徒は60%、その他40%の生徒は専門学校に進む。

Q: 小学生は、なかなか自分の言いたいことを言えず、自分の気持ちを表せないことで心理的な問題が生じることもあると思うが、どのように対応しているのか。

A: 小学1～3年生では「思想・品德」、中学では「心理・健康」の科目があり、「心理・健康」の授業ではカウンセラーの資格をもつ専門の先生がいる。寮での生活により、一緒に過ごす時間が多いので、そのような問題を解決するようにしている。

6月13日（水）雲南省教育庁

○雲南省について

雲南省はラオス、ベトナム、ミャンマーと国境を接しており、面積は39.4万km²、4,700万人の人口を有する。省の人口の3分の1に相当する8つの少数民族の自治州が含まれている。また、少数民族が多く、環境や天候に恵まれている地域であるため、「植物」「動物」「有色金属」の王国とも呼ばれている。中国政府は雲南省について、①民族団結②文明建設③南・東南アジアの経済の中心とする方針を掲げている。この3つの目標のために、教育・文化・社会発展に取り組んでいる。



雲南省教育庁の入口

○雲南省の教育統計

雲南省には小中高31,300校ある。幼稚園は10,156校で、143.1万人の幼児が在園している。義務教育学校は12,579校あり、生徒数565.67万人、教員数36万人である。高等教育は929校、生徒数152万人、専任教員は5万9千人である。

○教育の特徴

129ある県レベルの区画のうち、120県で義務教育が普及し、バランスよく教育が行き渡っており、その効果もよくなっている。残りの県もバランスよく発展していくように取り組んでいる。普通教育では特色化、多様化を目指している。職業教育、高等教育、民族教育、生涯教育においても施設や中身の充実に向けて進んでいる。特別支援教育は、人口15万人以上の地域には必ず設置されることになっている。また、国際交流においても発展し続けている。外国人留学生は19,000人に達し、中国全土で9位に位置している。雲南省から海外へは毎年公費で1,000人が派遣されている。海外との共同プロジェクトは29あり、アジアの9つの国で孔子学院を開いた。日本との交流も頻繁にあり、雲南省の大学に留学する日本人は2018年現在で約50人である。2019年3月に雲南大学法学院で日本刑法院研究センターが設立された。また、昆明理工大学と東京大学が学術交流のためMOUを締結し、13名の教師と学生が日本で短期交流し、2名は中央大学へ留学した。その他にも雲南師範大学・雲南農工大学は日本のいくつかの大学と交流を結んでいる。2018年、日中友好条約の40周年の年、安倍首相が中国を訪問した。両国の交流を進めるために、中国の高校生が日本を訪問するプロジェクトの継続を決定した。2019年3月雲南省教育庁は、イ族・ハニ族から49名の学生と教師を選択し、中国高校生訪日交流プロジェクトに参加させた。雲南省は日本との教育交流を重視しており、さらにお互いの理解と協力を進めたいと考えている。

質疑応答(抜粋)

Q: 日本の公立学校では自治体ごとに教員を採用している。雲南省を見学し、各学校の持つ裁量権・自由さに驚いている。雲南省ではどこまでを学校の権限として定めているのか。

A: 採用は地方による。あるところでは人事部門や教育部門が連携し決める場合と、学校のみで決める場合がある。師範大学卒業であれば、学校が採用してもよい。学校の教員採用権限はかぎられているが、これを広げていこうとしている状況である。

Q:教科をまたいで横断的に実施する総合実践は、いつから始まり、どのような教育効果があるか。またどのような課題があるか。

A:昔から実践していた。国の政策により2017年からである。教育部からの基準に沿って各校で実施する。また、学校の資源(科学技術、農業)に対応して、地域によって異なる。

Q:(雲南省教育庁からの質問)雲南省の教育は労働教育(しつけ、服の着方、木の植え方、茶わんを洗うことなど生活のし方)を重視している。雲南省の小学校や中学校には食堂がある。日本は給食か。以前、日本の小学生は給食のお皿を自分で洗うというのを見たことがある。これについて教えていただきたい。雲南省は労働教育に関して中学校の卒業試験に含めている。

A:日本の教育は世界各国から注目されている。学校で掃除をしたり、靴をそろえたりすることに他国は驚いている。これらの躰については教科で学ぶのではなく、課外活動で身につけるものである。

Q:(雲南省教育庁からの質問)ではどのように具体的に行っているのか

A:日本には、1・2年生で「生活科」という教科がある。その授業の中で身の回りを整えること、掃除をすることを全体的に覚える。また、家庭の中でどのように取り組んでいるかを子供たちは振り返り、生活の習慣を身に付けていく。特別活動の中に「学級活動」がある。そのなかで生活を振り返り、あいさつやそうじを身に付けていく。5年生になると「家庭科」という授業があり、料理・掃除・縫物をを含む衛生的なルールを身に付ける。その他、「総合学習」は環境を考える科目で、木を植える活動をする。

Q:時代の変化を雲南省は意識していることが分かった。グローバル化だけにとどまらず、情報化などにより子どもを取り巻く環境は変わった。雲南省全体で見て子供たちにどのような変化がみられたか。またそれに伴う教育の変化はどのようなものであるか。

A:中国全土の教育方針でみれば、徳・労・知・体・美を重視している。これを背景に、貧困地域、山奥、町との格差解消を目指している。特に初等中等教育の格差をなくし、均衡化と情報化を推し進めることは重要である。

Q:自尊感情に対する変化があるのかと思い質問した。日本の児童は自尊感情が低い、中国の子どもはどうか。

A:一人っ子政策により家庭では子供の自尊感情は大きいかもしれない。学校では道徳や労働教育によりお互いを助けることを養えるように工夫している。

6月14日（木）上海市甘泉外国語中学校

上海市甘泉外国語中学校は1954年に創立した中高一貫の公立学校で、上海市の特色のある学校である。運営理念は、「民族的な感情」と「国際的な視野」。また、多言語教育や文化的素養を育てることに重きをおいている。1972年に日本語の教育を開始しており、日本語を第一外国語とする中学の中では上海市で最も規模が大きい。現在、1,500人の生徒が在籍し、その約半数が日本語を第一外国語として学んでいる。外国人留学生は80人程度で、日本人の割合は多い。世界各国に姉妹校があるため、海外に留学する生徒は少なくない。中国人の生徒は高校を卒業して日本に留学する生徒が多い。一方、北京大学等の有名大学に進学する生徒もいる。

<学校のURL>

https://www.gqms.ptes.sh.cn/sites/cn_sh_pte_gqms_www/index.php?s=/jap/index/index.html

訪問内容

1. 意見交換会
 - ・出席者の紹介
 - ・学校説明（概要、留学生、日本語教育カリキュラム、日本語教育、通訳クラスについて）
 - ・日本訪問団より説明（日本の教育の現状、さいたま市立春野中学校、兵庫県立川西明峰高等学校について）
 - ・全体体育（運動場での体操、雲南省の4つ民族の動きを取り入れた表現、千手観音の踊り）
2. 施設見学（高級通訳基礎訓練センター、中国文化体験館）

日本訪問団より説明

1. 日本の教育の現状（文部科学省荒井氏より）

英語以外の複数言語を第一外国語として指導していることに驚いた。日本では英語以外の言語を教えている学校は少ない。第二外国語としてなら教えている学校はある。貴校は、カリキュラム、教材作成、国際交流やスピーチコンテストなどの実績も素晴らしい。日本訪問団の中には、教科、勤務地、経験年数等さまざまな教職員がおり、地域や国が違っていても学校における課題は共通するものが多い。これからもさらに中国と日本の教職員や生徒の交流を深めていきたい。
2. さいたま市立春野中学校 教諭 熊谷茂之氏より

さいたま市立春野中学校の教育目標は「明るく豊かにたくましく」であり、職員数は40名、生徒数は600名、17クラスある、さいたま市では中規模校である。教員は2021年度実施の新学習指導要領による「主体的で対話的な深い学び」とアクティブ・ラーニングを実践するために日々研修を積んでいる。教科担任制で専門性の高い授業を実施している。課外活動では、生徒が希望したスポーツや文化活動などの部活動があり、平日2時間、休日3時間程度実施している。に入って取り組んでいる。学校行事については体育祭、合唱コンクールなどがあり、生徒は充実感や達成感を得ている。
3. 兵庫県立川西明峰高等学校 教頭 赤松潤子氏より

公立の普通科で男女共学校である。生徒数は920人、教員数は70人で、グローバルキャリアコースを設けている。インドネシア、オーストラリア、韓国との交流やグアムへの修学旅行も実施している。生徒がインドネシアとネット上でやり取りしたり、5月には教員が来校して4回の講義が実現した。7月にはオーストラリアから40名の生徒を受け入れた。1年おきに双方の行き来きしている。11月にはグアムに約230名の生徒が修学旅行に訪れた。韓国の先生方が40名ほど来

校し、生徒が学校案内をして交流した。その他、地域にいる外国につながる住民との交流もある。グローバルにもローカルにも活動している。今後もグローバルな活動を展開したい。

質疑応答(抜粋)

Q: 中国国内で日本語を教える学校との交流はどのようなものか

A: 日本語教育に関する中等教育組織連盟の年次大会で交流する。全国にある約 60 校が参加しており、甘泉外国語中学はそのリーダー校。校長が連盟会長を務めている。年 1 回集まって話し合うほか、年 2 回会報を発行して情報交換を行っている。

Q: 入学試験について

A: 小学 6 年生の段階で個性を生かすことを重視しており、日本語を第一外国語としてさらに多言語の学習できるような生徒だけが入ることができる。面談など活動を通して総合判断される。中学校から上がってくる生徒が多いが、最近では高校からでも市の優秀な生徒は入ることができる。

6月14日（木）東方明珠

上海市浦東新区の開発に先駆け1991年に着工し、1995年に完成した。上海のランドマークの一つである。正式名称は『上海東方明珠電視塔』。高さは467.9mで、広州塔が完成するまではアジア第1位の高さであった。大小合わせて11個の球体が特徴の建物である。球体は『明珠』（真珠のこと）をイメージしている。球体展望台は3つあり、351m（太空艙）、263m（上球体）、90m（下球体）の高さのところにある。各展望台からは360度広がる上海の街を眺められ、夜は上海の夜景を一望できる。ガラス張りの床のフロアもある。エレベータは、日本の日立製で、建設された当時は、世界最速のエレベータであった。タワー内には展望レストラン、カフェ、上海歴史発展陳列館、お土産店もあり、たくさんの観光客で賑わっている。



6月15日（金）川沙老街

塩の売買で栄えたとされる、約450年の歴史を持つ街。明の時代の城壁が残る街としても有名。1950年代の街並みが残っている。多くの商店や市場もあり、古き良き中国を満喫できる。現在は商店街として地元の人々の暮らしの営みを垣間見ることができる。一角には、明代の城壁（日本の倭寇〈海賊〉から住民を守る為に構築したといわれている）や中国風情を感じる建物がある公園として整備されている。街の中には「黄炎培（近代の学者で教育に力を注いだ人物）」の住居が公開されており、古い住居の中を見学することができる。

3. 成果と今後への活用

A-01 高橋 勝也

(名古屋経済大学准教授)



未来永劫の日中友好に必要なこと

先の戦争を経験した日本と中国には、未だ解決しきれていない問題がある。これまでの両国の努力で確実に友好の絆は深まりつつあると言ってよい。しかし、政治的な要因などから、その友好に深い亀裂が生じてしまうことが度々あるも事実である。この繰り返しを脱却し、未来永劫の日中友好が実現するために必要なことを、本プログラムに参加した筆者は考えた。一言でいうと、「心」である。やはり、しくみや制度、条約などのルールには、日中友好の形を整える力はあるが、両国の亀裂を防ぐ、埋める力は兼ね備えていない。そのような中、日本からの本プログラム参加者は、いわゆる「完全中国ひいき」者だけではなかった。しかし、どこにいても熱烈な大歓迎を受け続ける度に、「どんどんと、中国が好きになっていく!」という偽りのない「心」からの言葉が団員から出てくるようになってきた。これからの時代は若者たちが築いていくのである。若いうちにこの「心」を育めば、両国間の敵対心はいつか完全になくなると確信した。

今後の活動について

- 本学は、在籍者の四分の一が海外からの留学生が占めている。しかしながら、日本人学生と留学生の交流が盛んと言えない状況にある。本プログラムで痛感したことは、やはり、受け入れる側が歓待しなければ交流の盛り上がりがあり得ないということである。したがって、本学の場合は、日本人学生に積極的に留学生を歓待する、もてなすような仕掛けを施すことで、学内全体での交流・友好ムードが高まると期待が持てるようになった。その実践に努めたい。
- 初等中等教育学校において、国際交流に関する講演を行うことがあるので、今回、得たことを伝えたい。前述の「心」だけが、国際的な課題を克服する力ギなのかもしれない。

A-02 赤松 潤子

(兵庫県立川西明峰高等学校教頭)



新しい中国の発見

私は、この度の中国訪問で今まで自分が持っていた中国へのイメージが大きく変わりました。社会科の教員ですので、これまで何度も中国に関する地理的授業、歴史的授業などを行ってきましたが、現代中国への理解が足りなかったと実感しました。国家が、自国と民族を大切にし、教育に惜しみなくお金を使い、都市と地方の格差をなくすために積極的な政策を打ち出されていることも知ることができました。出会った人々、特に身近にお話ができ、中国の担当者の羅さんや、観光案内をしていただいた方のお話は、興味深く、人として信頼できる方々だと思われました。現地で出会った生徒達は、はにかみながらも、英語で答えてくれたり、中には日本語で挨拶してくれたりと同じアジア人としてこれからも交流を続けていきたいと思いました。日本人の生徒達にとって、中国の生徒達と正しくかかわることは、これからの日本の行く末にとっても大切なことだと感じました。世界を救うのはやはり「人と人」だと感じました。

今後の活動について

- まずは、見て聞いたことを研修会で伝える事を行う。本年度も中国の生徒との交流受け入れを行うので、その場で、交流がスムーズに行えるように、細かい実施案の段階でアイデアを出していく。
- 社会科の教員向けに撮ってきた写真などを整理して渡し、社会科教員として、現代中国の様子について教材化していく。
- 若い先生方に対して、これからもこうしたプログラムへの参加を促し、学んだことの貴重さ、楽しさ、また、各地から来る日本人教師との交流ができることのメリットを伝えていく。
- すでに、明峰地区青少年育成会議の場で時間をいただき、雑感ですがお話をさせていただきました。
- 来月、地域の人権担当者会議でもお話しさせていただこうと思っています。
- 本校の学校説明会では、教員が中国交流、韓国交流に参加し、海外からの交流も受け入れているという説明に使わせてもらっています。

A-03 井田 志帆

(横浜市立市場小学校教諭)



(写真左)

課題に向き合うだけでなく

事前研修で中国の憲法第 19 条に目を通し、その積極果敢な表現に衝撃を受けるところからプログラムは始まった。「国家は社会主義の教育事業を発展させ、全国人民の科学・文化のレベルを向上させる」とある。この条文の通り、学校現場と行政が攻めの姿勢をもっていることに圧倒された一週間だった。

初めは「いじめ」や「不登校」などの教育課題の統計がないことに不信感を感じていた。しかし、中国教育部や学校現場の訪問を通して、課題を丁寧に解決することよりも、理想に向かうことにエネルギーを使っているのだと捉えなおした。児童生徒の才能を開花させること。農村の教育を発展させること。このように「レベルを向上させる」ために、各学校現場はハード面でもソフト面でも弾力的な運用することが許されていた。

日本はどうかと省みれば、様々な課題に向き合っているし、理想はあるけれど、実は具体的に描けてはいないのではないかと、それで前向きなエネルギーをもって教育ができるのだろうかという疑問をもつようになった。いつの間にか流されていたということがないように、教育の理想について語りたくなった。

今後の活動について

●教職員への報告

- ・夏休みの前後に教職員への報告する機会があるので、中国につながる子が受けてきた教育、日本との違いなどの視点で紹介したい。

●横浜市に設置されている国際教室担当者への報告

- ・横浜市で日本語指導に携わる教員の研修会で、報告できるように文書にまとめたい。

●児童の国際理解教育

- ・高学年の委員会活動で「人権・国際委員会」が日本にとって身近な国の文化を紹介する計画を立てており、中国が候補に挙がっている。新聞で発表するほか、イベントも開催する予定であるので、委員会の児童に訪問で見聞きたことを伝えたり、石林民族中学の文化交流で踊ったイ族の踊りをイベントとして提案したりしたいと考えている。

A-04 岩井 香奈

(筑波大学附属坂戸高等学校教諭)



(写真右)

26 もの少数民族をまとめる大国の教育秘策とは

中国は広大な領土に、55 もの少数民族を抱える大国である。気候風土や各省の特徴、民族的な文化も異なる人々が暮らす国で、どのような教育を行っているのだろうか。

プログラムの中では、中国国内で少数民族が最も多く暮らす雲南省に4日間滞在し、多くの少数民族に対する教育がみられた。雲南省の石林にある「石林民族中学」は、26 の少数民族が通う学校で、遠方に暮らす生徒は学校に併設されている寮に暮らしていた。披露してくれた伝統的な踊りには、古くより伝わる想いが込められており、生徒の真剣な表情には心打たれた。このように、少数民族として生まれた子どもたちが、学校に通いながら民族としてのアイデンティティも失わずに教育を受けることができるような環境づくりがみられた。

一方で、各地方で設定できる科目枠は、国家で指定されている教育課程のうちの数%である。中国教育部の「地域ごとの教育格差を埋める」という目標と、これら各少数民族独自の文化を存続させるといふ、相反するものを共存させる難しさも、肌で感じることができたプログラムであった。

今後の活動について

●私の勤務する高等学校には、国際科に「比較文化論」という科目が設定されている。本プログラムで目にした中国の少数民族には、「服装」「建物」「気候風土」「祭」など、様々な違いがあることを肌で感じた。この違いと、少数民族の人々がもつ「中国」という国家の共通性をテーマに、授業を展開してみたいと考えている。異なる文化的背景をもつ者同士が共存し、ともに発展していくためには何が必要かを生徒に考えさせたい。

●本校の教員に対しては、本校の大学附属という特性を活かし、①中国の教育改革がどのような方向性で行われていたのか、②日本の教育改革とはどのような共通点がみられたか、③日本にも活かすべき中国の教育に関する取り組み、の3点を中心に共有したい。

●本校は近隣に工場が多くあることから、外国籍の方が多く暮らしている。そこで多くの生徒が、ボランティアで日本語支援の活動をしており、外国籍の方と接する機会も多くある。これらの活動を、より意味のあるものとして長期的に続けていくために、授業で生徒に民族や国家の違いを越えた文化の共存のあり方を考えさせることで、地域社会に貢献していきたい。

A-05 岩渕 慎

(渋谷教育学園幕張中学校・高等学校社会科主任)



(写真右奥)

中国政府日本教職員招聘プログラム参加記

私は元々中国に対しては非常に興味を抱いており、その中で今回のプログラムに参加することができ、中でも教育という中国でも長い歴史を持つ分野を実際に見聞できるということで大いに期待した。

中国での視察では学校の概要・教育システムの説明を受け、現中国の教育方針を多少なりとも理解し、方向性についても日本と比較しながら聞くことができた。特に日本の特殊学校にあたる昆明盲啞学校での授業風景や現場教員の工夫・熱意は興味深く、日本の抱えている問題とも重ねて、心を揺さぶられた。また昆明のイ族を集めた民族学校では日本側参加者との交流がおこなわれ、現地生徒達の柔軟な対応に驚いた。一方で少数民族に対する教育の現状と国が発展をめざして考える教育のあり方の問題点にも考えさせられるところがあった。この他にも第一外国語を日本語とする上海甘泉外国語学校の様子など記すべきことは多々あるが字数の問題もあり、記しきれない。残念だが続きは次世代を担う生徒達に伝えることでこれに換えたい。

今後の活動について

●勤務校(私立中高)においては、個別に時間を取って説明することはないが、今回のプログラムの報告は職員会議でおこなう予定である。授業内においては社会科・歴史ということもあり、折に触れて中国の教育・現状・感じたことを生徒に伝えることはできるので、今後情報を自分で追加しながら、中国に対する理解を深めていく予定である。特に本校では、高校 1 年に希望者による北京研修(例年 4~8 名)、高校 2 年に北京修学旅行(例年 200 名前後)があるので、中国に関する話を話す機会は毎年ある。特に修学旅行では北京で全員が北京の学校と交流することになっており、生徒のアンケートを見ても、非常に交流が非常に良かったとあることから、理解を深める上でも今回の参加は大きく貢献できる。

A-06 大野 優子

(千葉県立千葉盲学校教諭)



(写真右)

文化の継承、そして異文化を認め合う社会へ

中国雲南省の学校を訪問し、強く印象に残ったのは、民族の文化を非常に大切にしている点でした。民族教育として、民族衣装に使われる刺繍、お祭りなどで踊られる伝統舞踊や民謡などの学習が盛んに行われていました。また、校歌の歌詞についても民族に伝わる文字でも表記するなど、経済発展めざましい中国ですが、伝統と文化を重んじ、大切に子どもたちに伝えていく姿勢に大変感銘を受けました。

一方、日本の子どもたちはどれくらい日本の伝統文化に触れているのだろうと考えてみると、今回、文化交流として行った盆踊りも、一度も踊ったことのない子どもが増えているのではないかと思います。自分たちの文化を大切にする気持ちがなければ、相手の文化を尊重する心は育ちません。国際理解教育をすすめながらも、日本の伝統文化に触れ、日本の良さに気づけるような学習活動も多く取り入れていきたいと感じた一週間でした。

今後の活動について

- 中国の文化や伝統、盲哑学校の様子、点字ブロック等について、生徒集会や前期終業式、昼の放送等で幼児児童生徒に紹介する。
- 中国の教育制度の概要や盲哑学校の教育等について職員に紹介する。

A-07 尾形 順子

(気仙沼市立鹿折小学校教諭)



(写真左)

サステナブルな教育活動を目指して

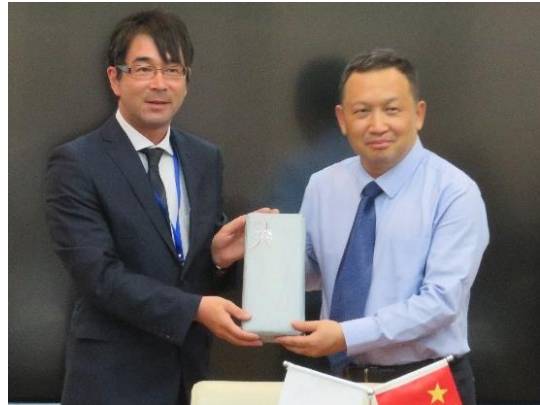
中国の教育実践に、教職員が誇りをもって取り組んでいる姿勢を目の当たりにし、感銘を受けると共に、自分自身の教員としての課題意識を深めることができた。急速な発展を成し遂げようとしている中国の教育施策について実際に触れ、中国の実状と施策及び教育の現状、さらに児童生徒の学び方を確かめてくることができた。また、外から日本の教育についても考える契機となり、日本の教育概念や自校の取組についての意味づけを明確にすることができた。北京市東交民小学校・昆明市書林第一小学校・芳草国際学校・石林民族中学・盲啞学校と多岐にわたって幅広く訪問させていただいたことによって、それぞれに感銘を受ける場面が多く、自分が中国の教育について十分に理解していなかったことにも気付かされた。隣国としての歴史や文化でのつながりが深いと感じていた中国訪問により得ることができた成果について、今後広く発信を継続するとともに、自らも実践者としての力量を高めるために価値づけをしながら指導に生かし、未来に志をもって行動できる児童を育むサステナブルな学校づくりのための教育活動を目指していきたい。今回のプログラムに参加できたことに感謝している。

今後の活動について(抜粋)

- 現地で実際に視察し学ぶことができた内容と、教育行政について得ることができた知識について伝講会を通して、教職員に伝える機会を 8 月に設定している。本校の外国語学習室の掲示板には今回のプログラムについてと参加を通した学びの内容についてまとめ、写真と共に掲示し、全校 200 名の児童が自由に見取ることができるよう設定し、1～6年生までの児童が理解しやすいよう工夫して発信する。また、今後、防災等の共通テーマを設定し発展性のある交流を実現させ、その過程の様子についても発信していきたい。また、国際理解と国際交流を継続・推進を目指し努力していきたい。
- 総合的な学習を通し、海洋教育についての実践を積み重ねてきた本校の活動を引率する際に今回の訪問での学びを具体的に活用したいと考えている。外国人労働者が地域で安心して生活し元気に働いてほしいという児童の願いから企画した具体策を、企業や地域に対しプレゼンテーションを実行するまでの経過においてもアドバイスをしたいと考えている。
- ESD・SDGsを意識した取組の中で、児童自身にグローバルな視点をもった探究を重視した学びとなるよう、指導するための手立てとして今回の中国訪問での学びを生かしていきたい。

A-08 小野寺 裕史

(気仙沼市教育委員会副参事(指導主事))



(写真左)

視野の広がり深まりがうまれた中国

グローバル化する現代社会において必要な教育は、世界の課題をとらえ、そこから地域を考えるものであると感じていた折に、今回このプログラムに参加することができ、大変有意義だった。

教育の環境整備、ICT化などでは、中国の先進性を感じた。一方、中国が日本の教育の素晴らしさを取り入れて教育改革をしているなど、私たち日本の教育は、世界の中でも優れたシステムと人材によって行われているということも感じる事ができた。また、中国の子供たちとの交流の機会も設定され、満足ができる内容であった。こうした中国の教育だけでなく、歴史や文化を感じることができるプログラムや食事を用意されており、肌で中国を感じることができた。

日本各地から参加した教員の皆さんの人柄や教育への熱い情熱が、忘れられない中国の思い出となった。また、同行した職員の方々や現地のガイドさん達の行き届いた配慮に深く感謝したい。

今後の活動について

●中国の教育事情や学校の様子などの情報を提供することにより、教員や子供たちの国際的な交流への関心を高めたいと思う。具体的な取組としては、写真等の映像と説明を組み合わせたものを使って、要請に応じて伝えられるようにしたい。

また、現在、多くの市町村で教育のICT環境整備に課題がある。今回の訪問でみてきた中国の教育現場の様子を伝え、ICT環境の整備の必要性について協議していきたい。

●気仙沼市は中国舟山市と友好都市として交流事業を行っていたが、震災後には、その交流が行われていない。気仙沼市の主産業である水産業などでの交流も大切なことである。中国から気仙沼市内に嫁いでいる方もいるので、今後、中国の歴史や文化の素晴らしさと私が感じた中国の人々の魅力について伝えることができれば伝えていきたい。

A-09 熊谷 茂之

(さいたま市立春野中学校教諭)



一期一会 ～不易の視点の学び～

本研修では、多くの人との出会いがあった。その出会いから多くの学びを得ることができた。

1つ目は、「子どもを愛する姿勢」に関する学びである。日中の教師の共通点として、「子どものため」という視点に基づいて日々研鑽に励んでいることを実感した。確かに国の体制や実情は異なる。しかし、目の前にいる子どもたちをどのように成長させるかといった共通の目標は同じであった。その姿勢は教育に携わる者としての原点であり、不易の姿勢であると実感できた。

2つ目は、「対話の重要性」に関する学びである。中国の教員、子ども、日本の訪問団の方々との対話の中で、自らの教育観を揺さぶられ、省察を深めることができた。自らの知見や見識の浅さを実感できたことは大きな収穫であった。それは、今日本の教育が目指す「主体的で対話的な深い学び」を教師である私自身が体感できた貴重な経験であった。

本研修は終わりではなく、「スタート」であると捉えている。国際理解の視点を持ち、「謙虚・感謝・誠実」を大切に、今回の一期一会を胸に秘め、教師として、人として、成長していきたい。謝謝！

今後の活動について

●研究主任、埼玉大学大学院での学びを生かし、3つの手段で多くの教員に還元していきたい。1点目は、校内研修で報告会を実施し、そこから中国との交流をはじめとした国際理解の視点の重要性を共有する。2点目は、さいたま市の社会科サークル、各種研修会を通して、市全域にその成果を広げたい。3点目は、埼玉大学教職大学院生として、研修の成果を学部内で共有し、県全域へ発信したい。

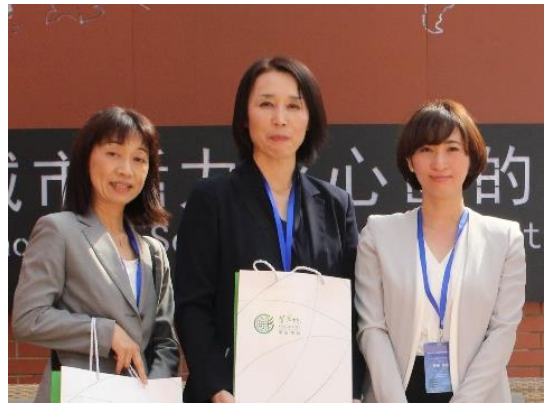
また、異文化理解の視点で、学校運営に携わることで、本研修の成果を還元したい。

●本研修で出会った訪問団の方々と、今後も継続して連携していきたい。特に国際理解の観点を大切にして、自治体の枠に捉われず協働しながら新たな取組に参画していきたい。

また、国際理解の視点で在日中国人の方々やその他の国の方々とも積極的に連携し、本研修の成果を生かしていく。

A-10 宮崎 紀子

(大牟田市立明治小学校主幹教諭)



(写真左)

中国訪問で学んだこと

私は、今回の研修を通して、2つのことを学んだ。1つ目は、中国における環境教育である。我が校と同じように、発達段階に応じてテーマを決めて、系統的にカリキュラムを構成している学校もあった。一週間という行程の中で、環境を守る取組が学校でも社会においても進められていることを理解することができた。2つ目は、中国の教育の現状である。実際に様々な学校を訪問する中で、社会の変化に対応しながら教育の改革を目指していることを知った。特に「ICTの活用」については、電子黒板が活用され、プログラミング教育も積極的に行われていた。日本では来年度から新指導要領が完全実施されるが、中国ではすでに先行実施されていると感じた。また、「徳育」において学校の理念を実践するため、学校独自のスタイルで資料を作って授業を展開していることも興味深かった。

以上の学びを今後に生かしていくには、得た情報をまとめて、教材にして広げたり、国際理解教育に関する研修を自分なりに積んでいくことではないかと考える。このような研修に参加できたことを心から感謝している。

今後の活動について

●大牟田市教育委員会において

- ・6月20日 報告会（教育長、学校教育課長、総括指導主事同席）明治小学校において
- ・6月 朝の活動「学級の時間」において6年生と3年生の各クラスで写真を見せながら中国と日本の学校の様子の違いについて話をする。
- ・7月 掲示板にコーナーを設け、中国と日本の文化の違いが感じられるように、写真や作品を掲示したり、説明を加えたりする。
- ・8月 職員に中国の環境教育やICTの活用の様子を伝え、国際理解教育に対する関心を高める。
- ・9月 大同市（姉妹都市）からの学校訪問を受け、交流を行う。

●今まで以上に、国際交流、異文化理解に力を入れたいと思いを強くした。今回の学びを国際理解教育に関する職員研修としてホームページに掲載し、保護者や地域の方にも伝えようと考えている。

●本プログラムで知り合えた先生方とのネットワークを、これからの本校、さらには大牟田のESDに生かしていきたい。

A-11 渡辺 道治

(札幌市立屯田西小学校教諭)



私たちの手で次なる井戸を

まだ日中の国交が回復していなかった頃。「民が官を促す」という考えのもと、積極的な貿易事業を展開することにより早期の国交回復を図った日本人がいる。名前は岡崎嘉平太。彼の尽力により日中国交正常化を間もなく迎えることになった時、周恩来元首相から岡崎嘉平太は次のように言葉をかけられたという。「中国には『水を飲む時、井戸を掘った人のことを忘れない』という言葉がある。間もなく田中首相が来られて日中の国交は回復するが、その井戸を掘ったのは岡崎さん、あなただ。」

その日中国交正常化 30 周年を記念して 2002 年から行われている、この教職員招聘プログラム。終了後何よりも強く感じたのは、自身の中にある「中国」と「中国人」に対する認識の変化だった。領土問題、反日教育、歴史認識の齟齬など、今回のプログラム前に存在した中国に対する引っ掛かりやわだかまりが、日を追うごとに取っ払われていく事を感じた。親しい友人が出来、共に教育を語り合える仲間が出来ていく中で、心の内での国交が回復されていくような印象を受けた。このプログラムを続けて来られた ACCU の皆さんをはじめ、日中友好のために井戸を掘り続けてくれた先人の足跡に倣い、私自身もその懸け橋の一部となれるように努めようと思えたプログラムであった。

今後の活動について

- 社会科・総合的な学習の時間における情報の活用。
- 個人的につながった先生との交流学习の実施。
- 校内におけるプログラムで学んだことの発表の実施。
- プログラムをもとに作った授業コンテンツの共有。
- 講演会において今回のプログラムの内容をお伝えすること。
- 所属する研究会において今回のプログラムの内容をお伝えすること。
- 現在研究会で開発中の教材に、今回のプログラムで学んだことを盛り込むこと。

B-01 川崎 由美子

(大牟田市立大正小学校教頭)



教育は国境を越える

初めて中国の学校や教育庁を訪れ、教育環境や教育内容の充実、教職員の質の高さに驚いた。英語教育や IC 機器を活用した学習が充実しており、子どもたちが自分の考えを積極的に話すことができていた。また、国の施策に道徳が盛り込まれるなど、道徳教育も充実している。

多くの学校を訪問させていただき、国は違うが知力、体力、道徳を身につけたグローバル人材を育成していることは変わらず、教育は国境を越えることを理解することができた。子ども達はますます世界中の人とつながり、互いの価値観を理解し手を携えていかなければならない。その中で教育の果たす役割は大きいと考える。

今後、この経験を生かし、異文化に対する理解とグローバルな視野をもった児童の育成に取り組んでいきたい。また、持続可能な社会の実現のために、教育課程の充実や人材育成にも積極的に取り組んでいきたい。

今後の活動について

- 本校や市の教育課程を見直し、英語教育やプログラミング教育、IT 機器を活用した教育内容の充実を図る。また、課題に応じて自分の考えを話す取組を増やし、様々な考えをもつ人と交流する活動を取り入れるカリキュラム作成を行いたい。
- 異文化を理解し、自国とともに他国も愛し、同じ地球人としてグローバルな視野をもち、持続可能な社会を目指す教員の育成や資質向上を図っていきたい。
- 中国の教育実情や子どもたちの様子など見て学んだことを本校職員や地域等へ広げ、国際理解が進む一助となるようにする。

B-02 泉 裕子

(横浜市立日枝小学校主幹教諭)



生きた教材研究(抜粋)

私の勤務する学校は、外国につながる児童が 20%、そのうちの 15%が中国につながる児童である。中華街に近い学区のせいもあるが、ほとんどの児童は、先に保護者が来日して生活の基盤を作り、その後、兄弟を一人ずつ呼び寄せるという少々いびつな家族環境の中、生活している。昨日、成田に着いて、翌朝、異国の小学校に連れてこられる子供たちの表情は、はじめはとても暗い。そんな子供たちのために、私の所属する国際教室はある。日本語だけでなく、日本の生活様式、習慣、日本の学校の生活について丁寧に教えるのが第一段階。慣れてきた子供たちには、教室の中での仲間づくりのお手伝いや日本語に重点を置いた指導が第二段階。最後の段階として、学習の遅れに対応した補習。子どもたちが自分を好きになるためにどのように環境適応のお手伝いをするかが日々課題である。

帰国して、子供たちに実態調査をした。中国の小学校での教科担任制は、地方都市でも進んでいるのか、宿題はどの程度なのか、選択科目は小学校からあるのか、英語をどの程度話せるのか。

よほどの、山村地域の出身の子でない限り、技能教科と英語は教科担任、国語算数のみ同じ先生という答えが多かったが、理科や社会はほぼ、教科担任だった。子どもたちは言う。「そのほうが授業が分かりやすいです。」日本の小学校は、いまだにほとんどの授業を担当一人が切り盛りしている。授業のクオリティとしては、中国の体制の方が明らかに高いであろう。

今の私のできることは何か。今の状況の中で、いかにクオリティの高い授業ができるか、そのためのシステムの構築を考えたい。まずは自分の学校で、担任たちがうまく自分の専門性を生かした授業を展開できるかを、教務として考え、提案していきたいと思う。

今後の活動について(抜粋)

●国際教室の子供たちと、中国派遣で食べた食事の写真を使って、中国の食文化について語り合う授業を展開している。子どもたちは食べたことのある食材や料理について、一生懸命語ってくれる。食べたことのあるお菓子やアイスなど、とてもうれしそうに話しながら、同じ地方から来た子同志は盛り上がり、違う地方から来た子たちは互いに驚きながら会話している。中国の食べ物を身近に思い出している。

●職員研修を冬休みに計画している。実際に中国で私自身が学んできたことを、本校の先生方に共有することで、全クラスに在籍する中国籍の子供たちへの理解を深めてほしい。

国際教室在籍児童だけで、一堂に会して給食を食べる「国際給食」が年に 3 回催される。その際に、子供たちと自分の好きな中国の料理について、トークしやすいようにかるた形式でカードを作成中。

B-03 牛坂 留都

(埼玉県立常盤高等学校教諭)



「澄んだ青空」と「教育に国境はない」

街中にはゴミもなく、澄んだ青空と、野菜が美味しい国でした。これまでの報道で、黄砂や大気汚染のことを聞いていたが、いつの話だったのか疑いたくなった。国の政策で、工場の場所は移転し、CO₂排出削減のために電動バイクが増やし、街中には清掃員、トイレ改革、ゴミの分別（上海市）も急速に進んでいた。これらのことから、中国が急速に変化できる国であることを体感した。教育では、児童数は1億人で、1クラスも55人という所もあった。しかしどの生徒も、どの教科でも、真面目に活き活きと学んでいた。印象に残っている言葉として、昆明市若草地国際学校の絵画で活躍する生徒が、クリスチャンラッセンから言われた言葉で「この世の中では美しいものが沢山ある。その美しさが少ないということは、美しさを発見する目が少ないということです」という言葉である。私はこれまで中国に興味関心が薄かったが、自然豊かで、古いものを大事にし、家族愛が強く、本当に美しい国だと感じている。その想いを、まずは授業実践を通して、生徒自身が美しさを発見できるように育みたいと思う。

今後の活動について(抜粋)

- 埼玉県教育委員会『未来を拓す「学び」プロジェクト』の研究員として、知識構成型ジグソー法で、「中国から学ぶジェンダー（仮題）」について、研究授業を行い全国に公開する予定である。（令和元年9月予定）
- 学校内では看護科の教員として、文部科学省のスーパープロフェッショナルハイスクール（SPH）の後継プロジェクトとして、後期からの授業（母性看護学）で、中国での活動内容を含めた授業実践を行っていく予定である。
- 具体的な内容としては、中国の女子校生（ジャージに赤スカーフ）、タピオカミルクティー、キャッシュレス、安全対策、家族愛（残業しない）、定年は女性 55 歳・男性 60 歳、量の文化（教員の担任手当て+17 万）、先生方の評価は廊下に掲示されるなど、生徒が興味関心をもつ内容を、写真等を使ってリアルに伝えたい。
- 昆明市盲啞学校（専攻科）で鍼灸師を目指すダウン症候群の青年（両目義眼）の話は、私が医療ボランティア活動をしている、日本のダウン症のある親御さんたちの集まりで、是非伝えていきたいと思っています。中国では、視覚・聴覚・言語・知能に障害を抱えている子どもは「最も愛される子ども」と言われていると聞いた。中国は学歴社会であるが、障害児・者に対しては「心のインクルーシブ」が備わっている国であること伝えて行きたい。

B-04 梅枝 駿

(セントヨゼフ女子学園高等学校・中学校教諭)



日中交流

私の勤務校は私立学校であり、公立学校と比較して異動がないぶん外部との交流が少ない。自分を研鑽するためには、自ら外部の研修へ出向く必要があると常に考えていた。そのような時、管理職からこの派遣プログラムを紹介された。しかし、ためらうことなくすぐに返事をすることはできなかった。その理由としては日中の国交問題や日本を観光する中国人のイメージからいい印象がなかったからである。しかし参加して本当に良かったと感じている。まず、日本全国の教員と交流を持てたことがよかった。教育に対し熱く、高い志を持っている方々と長い時間を共にできたことは、まだ教員歴4年目の私にとって、大きな糧となった。また、様々な学校を訪問したが、中国の教員や児童生徒、プログラムのスタッフは私たちに対し本当に温かく、自分が持っていた中国への印象と正反対であった。それは本プログラムへ参加することをためらった自分が恥ずかしくなるほどであった。確かに領土問題などなかなか互いの理解に至らない。しかしそれは日中の「官」の問題であるのではないかと感じた。「官」が「民」を動かすのではなく、このような交流プログラムを継続していくことで、互いの理解が深まり、「民」が「官」を動かすことにつながるのではないかと思った。

今後の活動について(抜粋)

●地理分野での活用

本プログラムでは、北京―雲南省―上海と中国の中でも様々な地域を訪問することができた。その土地の雰囲気や、文化、生活を体験することができた。教科書には載っていないこともたくさんあった。教科書では「異文化交流・共生社会」について扱う箇所があるため、そのようなところで資料として活用したい。

●本校は、創立以来グローバルな視野をもった教育がなされてきた。これからも国際感覚を身につける環境として、三重県においては先駆的な役割を担い、三重県下唯一の女子校として生徒も職員も輝き続け、国際社会に貢献できるリーダーシップのとれる女性を育てることを目指している。外国語という英語のイメージが強く、世界共通語としての関心もとても高い。今すぐ、中国との交流を学校の教育課程に組み込むことは難しいが、今後中国の学生と英語を使ったコミュニケーションに取り組むなど提案をしていきたい。

B-05 昆野 玄

(気仙沼市立面瀬小学校教諭)



(写真右)

教育環境の整備と教育水準の充実

小学校、国際学校、中学・高等学校、盲啞学校、外国語学校と多種多様な校種を訪問させていただくという大変貴重な機会を得た。近年経済発展著しい中国における教育事情を知れたことは、自身の知見を広げるという意味において、大きな意味を成した。公立学校ではあるが、日本と財源が大きく違った。国や地方からの資金で年間の予算が4～5億円ということに驚いたが、実際に各校に訪問することでそれを実感することができた。大型のテレビや黒板に内蔵されたスクリーン、教室備え付けの ICT 機器を見て、その充実ぶりを感じた。教材も実に充実していた。児童1人1人に行きわたるパソコンやタブレット、それを生かしたプログラミング教育ということも行われており、日本の教育の先端を行っているようにさえ思えた。機材だけが充実していたのではない。教師も生き生きと働いており、児童生徒の作品等から各教科の専門性の高さを感じた。昆明市の学校では、教師が授業をしている傍らでもう一人の職員が丸付け等の事務的な仕事を行っていた。日本にはまだそのような環境はほとんどない。現状では、教材研究にあまり時間をかけられず、事務処理に追われるという仕事の仕方を強いられている教師もたくさんいる。中国の教育水準の充実ぶりを体感することができた研修になった。

今後の活動について(抜粋)

●各訪問先でいただいた資料や訪問先で撮影した写真、頂戴した記念品をイングリッシュルームに展示した。資料や写真等を通じて、中国への関心が高まる機会になるのではないかと考えている。掲示した写真や資料等に関心をもった児童からは、中国の子供たちの様子について聞かせて欲しいという申し出もある。全校朝会で、中国と日本の学校の共通点や相違点を全校児童に伝えた。現場の職員にも視察に行って得た成果を積極的に伝えるようにしている。写真等の回覧も行い、少しでも様子が伝わるよう心掛けた。今後、視察の成果を伝える場が設けられた場合には、積極的に協力し、得た成果を発信したいと考えている。

●地域では、体育部の役員を務めており、市民運動会の運営や体育的なイベントの企画等に携わっている。気仙沼には中国人の方々もたくさん住んでいるが、私の住む地区に中国籍の方が住んでいるという話は聞いたことがない。逆に中国に行ったことがあるという方もほとんどいないため、中国に関する具体的なイメージはほとんどないという現状である。地域コミュニティにおいて、気仙沼在住の中国の方に私たちが主催する体育的なイベント等に参加してもらい、地域の方々と体を動かしながら楽しく交流することを考案したい。その中で私の経験を活かして地域の方々との橋渡し役になればよいと考える。

B-06 笹村 洋子

(北秋田市立鷹巣小学校教諭)



(写真右)

中国の学校教育に触れて

雲南省の学校を訪れたということもあり、伝統文化を継承する活動を見る機会がたくさんあった。刺繍、書、舞踊…専科の先生方が指導するので、どれもとてもすばしかった。その一方で、英語教育、プログラミングなどの現代的な課題に対応した活動も進められていた。英語で話しかけると、物怖じすることなく返答してくる子どもたちに驚かされた。古くから伝わるものを大切にしながら、新しいものも積極的に取り入れていく中国の教育の姿勢を見ることができた。また、中国では日本の「労働教育」(給食、掃除を含めた様々な日常生活の指導のようである)に関心をもっているという話がたびたび聞かれた。中国側から日本に対して教育面での交流が求められていることを知り、国際交流活動への関心がさらに高まった。今回の訪問は私にとって、日本でも中国でも変わらない子どもたちの笑顔とかがやく未来のために、何ができるかを考えていくスタートとなった。

今後の活動について

- 中国訪問についての展示コーナー(児童向けと教職員向け)を設置し、プログラムでの活動内容を広める。
- 校内研修会や市教育センターの所員発表会において、プログラムを通しての学びを伝達する。
- 6年生の社会科「日本とつながりの深い国々」の学習の際に、中国について紹介する。
- 中国訪問についての報告書を作成し、勤務校以外の県内の教員仲間に配布する。
- 身近なところで行われる日中交流活動等に積極的に参加するようにする。

B-07 下地 徹

(大牟田市立みなと小学校主幹教諭)



(写真右)

ACCU 中国政府日本教職員招聘プログラムを通して

今回、様々な方々のご支援のもと、中国政府日本教職員招聘プログラムに参加させて頂きました。プログラム期間中の経験はどれも有意義なものでしたが、中でも次の二点についてはこれからの私の教職員としての考え方に大きな影響を与えるものであったと感じています。

一つは、中国の様々な教育活動を実際に見て感じ、特色を知ることができたことです。特に ESD に関して、「教育の均一化」を目指す中国教育部の施策は、「誰一人として取り残さない」という SDGs の根本理念を具現化するものでした。また、英語教育や文化、伝統を重んじる教育活動にも感銘を受けました。もう一つは、ESD に関する様々な教育活動を実践する日本国内の先生方とネットワークをつくることができたことです。それぞれの先生方が取り組まれている実践のお話を伺って刺激を受け、今後の自身の実践の拠り所とすることもできました。今回のプログラムを通して得た知見や情熱を、これから大牟田市ならびに福岡県における教育活動に還元し、今後も全国の先生方とのネットワークを大切にしていこうと考えています。

今後の活動について(抜粋)

●本校の総合的な学習の時間を中心とした教育課程を創る

ESD の理念については国の枠を超えて共通的な価値として認識されていることを肌身で感じる事ができたので、本校の ESD についても「海」を通して中国との交流を検討するなど、よりグローバルな展開を考える。それらの教育活動を通して、子どもたちに ESD の理念が国の枠を超えた普遍的なものであると感じさせることが大切であると考えている。

●團琢磨 氏の意志を通して「海」の価値を再認識させるプログラムを創る

自国の伝統や文化を重んじながら持続可能なまち(国)づくりを進める意義を再認識したので、本校でも校区にある世界文化遺産である三池港に関するプログラムを再検討し、改善したい。その際、三池港を含む三池炭鉱を計画した團琢磨 氏の生き方や考え方を絡め、未来を見据えた三池港や海の在り方を考えていく活動としていきたい。

●学習サークルや若年教員対象の研修会などで、今回のプログラムを通して学んだ内容について報告する会を設ける。特に ESD については、言語、文化等の国の枠を超えた普遍的な価値があることを伝えていきたい。また、それらの報告を通して、実践者として考えられる教育活動について検討会を開きたい。

B-08 寺阪 多江

(和歌山県立古佐田丘中学校教諭)



(写真右)

「百聞不如一見」「知之為知之、不知為不知、是知也」

「変化激しいといわれる、これからの時代を生きる生徒たち。何を伝え、どんな力を育成することが彼ら彼女らのこれからの人生をより豊かに実りあるものにしていけるのか」自問自答しながら日々生徒たちと接している。勤務校は中高一貫校で、数年前にユネスコスクールに登録。そういった特色を生かした教育実践はできているのか。今回のプログラムに参加する機会をいただき、今までとは違った答えが見つけれそうな気がしている。今回のプログラムに参加する前、生徒たちに問いかけた「中国の印象」。マスコミからの情報で聞いた言葉を口にする生徒たち。私自身は10年以上前に訪問した北京や上海で受けた印象を思い出しながら、私たちが「知っている」と思い込んでいることがどれだけ偏ったものであるのか、情報社会といわれる現代、どれだけ「情報」に操作されているのかについて再考する機会となった。

中国の地に降り立ち、学校に赴き関係機関を訪問し、先生方や教育に関わる人々や子どもたちと出会い、場を共有し見聞きし感じたことの数々。これからの時代を生き抜く生徒たちに伝えたい。「百聞は一見に如かず」「知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす、これ知るなり」と。

今後の活動について

●職員対象に報告会実施の予定。先生方が持っている「中国の学校」についての印象を事前記入、プログラム中の写真や映像を提示し、印象の変化を聞く予定。中国山東省に姉妹校を持つ本校ではあるが、中国の学校を訪問されている先生は数名であるので、今回訪問した学校の様子をお伝えし、中国での教育事情を知っていただきたいと考えている。また、生徒たちの中で、海外に興味をもつ生徒たちに映像を見せたり、話をしたり、国際理解へと興味を広げる支援をしたいと考えている。

B-09 藤田 有記

(熊野町立熊野第一小学校主幹教諭)



(写真中央)

伝統や文化を大切にしている国

このプログラムに参加する前と参加した後では、私の中国に対する印象はがらりと変わった。まさに“百聞は一見に如かず”であると感じている。まず、最初に中国の都会ぶりに驚いた。超高層ビルが並び、アイスクリームを買う時でさえも現金ではなく、スマートフォンで支払いをしているその光景は、まさに近未来として昔の人が創造した図、そのもののようであった。そして、実際に学校を訪問して、学校の施設がとても充実していることにも驚いたが、何より、子どもたちの目がキラキラと輝いていて、笑顔がとても素敵だということが印象に残った。そして、どの子も一生懸命先生の話聞き、熱心に勉強に取り組んでいた。違う民族衣装を着ていても、互いの文化を大切に、伝統を受け継いでいこうとする雰囲気がとてもよく伝わってきた。近代化していく中でも、自分たちの文化や伝統をこれからも大切にしていこうとする教育を感じることができた。私が感じた伝統や文化を大切にしている中国のことを子供たち、先生方に発信し、中国のことに興味をもってもらいたいと思う。

今後の活動について

- 中国の文化・学校・食・町の様子・動画などを子供たちに紹介する。
 - 学校の掲示板に中国のことを紹介するコーナーを作る。
 - 校内・町内の教職員との情報の共有をする。
- 以上の活動を通して、中国への興味関心を高め、互いの共通点や相違点を理解しようとする態度を育成し、つながりをもちたいという気持ちを持たせる教育を行っていききたい。
- 機会があれば、町内の先生への発表の機会を設けて、学んできたことを知っていただきたい。
 - 町内の広報で、写真等をつけて報告したい。

B-10 松山 俊治郎

(松本秀峰中等教育学校教諭)



(写真左端)

公教育のあるべき姿とは

中国での教育を目の当たりにし、なによりも実感したことは、あらゆる教科において「スキルレベルを上げる」という目標設定が徹底され、そのことを教員・生徒の両者が当然のこととして是認している現状があるということだ。また社会全体として、教育成果の延長線上に社会の発展があり、そこには積極的に投資をしていくべきだろうというコンセンサスを感じ取った。

全人的な教育による人格の完成を目的とする日本の教育制度は、多角的な評価により生徒の生き活きとした成長を引き出すという目標を掲げ推し進められてきたが、一方では現場に一種の混乱をもたらしたと省みることもできる。もちろんその両者の良し悪しをここで結論付けられはしないが、両国が持つ「公教育のあるべき姿」それぞれの実像を現場の実践の中から感じ取れたことはなによりの収穫だった。

また、知識偏重の入試に対する問題意識のように、日中間で共有可能な課題も存在し、近い両国だからこそできる協力関係を築きながら模索していく必要性を強く感じる 7 日間であった。

今後の活動について

- 教科の面においては、今回プログラムで身に付けた国際的視野・視点を毎授業に織り込んでいく。
 - 生徒向け報告会、兼講習会を実施
 - 教員向け報告会を実施
- 以上を行う予定でいる。

B-11 宮腰 卓秀

(北海道札幌国際情報高等学校教諭)



(写真右)

ところ変われど教育変わらず

私は、2007 年から 2009 年にかけて内モンゴルにあるオルドス市第三中学で日本語教師をしていた経験がある。大学受験のために日本語を選択していた高校生に日本語を教えていた。その時の学びに真摯に向かう生徒とそれを教える先生の熱量、今回のプログラムに参加して、10 年たった今も何ら変わらず、その国の将来を担う子どもたちの幸せを願う気持ちに日本も中国も、世界中のどの国も違いはないと改めて考えさせられた。日本の教育は大学受験から大きく変わろうとしており、教育の質そのものの転換期でもある。学びの主体は生徒(子ども)たちという認識は万国共通であり、頑張っている先生の姿は美しく、自身もまだまだ進化しなくちゃという気持ちになった。それは中国の小学校の先生からも、特殊学校の先生からも、通訳の羅さんからも、そして今回のプログラムに参加した日本の先生方からも。今後は、赴任校での国際理解教育や中華圏の語学研修先復活に向け、尽力していきたい。

今後の活動について

●本校において、まず、生徒への還元は授業で中国の話をする事、特に国際文化科(英語に特化したクラス)では、毎年秋に 1 年生のイングリッシュキャンプという一泊二日日程で行われるオールイングリッシュのプログラムの中で、中国語で今回参加したプログラムを紹介する予定である。また、語学研修先の候補到北京や上海だと保護者の理解も得られやすいだろうが、今回訪問した昆明市も候補に入れたと感じた。

事業担当者コメント

都市部と地方の教育格差解消のために教育政策がどのように取り組まれているのかを視察する絶好の機会となりました。雲南省では都市部に比べると社会経済的な発展状況が十分でないという説明がありましたが、訪問した学校の多くの教室には電子黒板が壁にはめ込まれ、プログラミング、書道、音読の授業では、タブレット使用をはじめ教材や道具が充実していました。カラフルな色使い、陽の光がよく入る、明るい教室からは、学習環境づくりに力を入れて子どものワクワク感を醸成していることがわかりました。

一方、授業実践に携わる現場の教職員との交流や声を聞く機会が少なかったことが心残りでありました。日本教職員訪問団の半数以上は学校現場（教室）で、日々児童生徒と向き合う教員であったので、その点の期待に応えられなかったことが次の課題です。石林民族中学では幸い文化交流が叶いました。大野優子先生、泉裕子先生が事前に計画し、訪中前に訪問団全員で練習した盆踊り（ドンパン音頭）や、直前に追加で設けられた機会に陣頭指揮を快諾してくださった渡辺道治先生のバイオリン演奏とそれに合わせた「ふるさと」「糸」の合唱を通じて生徒と交流しました。子どもを目の前にした日本の先生方の生き生きとした様子から、このような機会がさらに増えるよう、中国側とこれまで以上に連携し、訪問先の事情や状況を理解しながら、日本側の運営者として引き続き働きかけていきたいと考えております。

このプログラムは7日間で終わるものではなく、帰国後に参加者である日本の先生方が、その知見や成果を各現場で還元してくださることにより、日本の児童生徒や教職員、地域の方々にも、参加者の目を通した中国が伝わり、国際理解が深まっていきます。ご参加くださった、全国各地のさまざまな校種のキーパーソンである先生方のご活躍に期待しております。

都市と地方、両方の教育現場に加え、世界遺産等の文化施設の訪問も含めた充実したプログラムを計画してくださいました中国教育部ならびに中国教育国際交流協会をはじめ、中国および日本の教育関係者各位、そして多くの示唆を与えてくださった日本教職員の皆様にあたたためて感謝を申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部 伊藤 妙恵



付録

各訪問先での主な出席者

日にち	訪問場所	出席者
6月09日	歓迎夕食会	中国教育国際交流協会 副秘書長 沈 雪松
		在中華人民共和国日本国大使館 参事官 藤岡 謙一
		在中華人民共和国日本国大使館 一等書記官 菅原 孝介
6月10日	中国教育部	中国教育部基礎教育局 副局長 俞偉躍
		中国教育部国際交流局アジア・アフリカ課 課長 李旭東
		中国教育部基礎教育局義務教育課 課長 朱東斌
		中国教育部財務局地方財務課 課長 王 俊
		中国教育部基礎教育局普通高等学校教育課 副課長 趙 宇
		中国教育部基礎教育局特殊教育課 課長補佐 王紅葉
		中国教育部国際交流局アジア・アフリカ課 事務担当 呉 波
6月11日	昆明市書林第一小学校	昆明市書林第一小学校 校長 王 瑶
		昆明市書林第一小学校 教頭 序々
	昆明市芳草地国際学校	昆明市芳草地国際学校 校長 張 宏
	交流会	昆明市書林第一小学校 校長 王 瑶
		昆明市書林第二小学校 校長 嚴 氷
		昆明市芳草地国際学校 校長 張 宏
6月12日	石林民族中学	石林民族中学 書記 王学宏
		石林民族中学 校長 吉世彥
6月13日	昆明市盲啞学校	昆明市盲啞学校 書記 楊志成
		昆明市盲啞学校 校長 蕭勝南
	雲南省教育庁	雲南省教育庁 副庁長 鄭 毅
		雲南省教育庁 基礎教育所 副所長 馬金權
		雲南省教育庁 国際交流連携所 准調査員 王 濤

		雲南省教育庁 国際教育交流センター副主任 蘭 雁
		雲南省教育庁 連携所プロジェクト役員 曹 旻
		雲南省教育庁 連携所プロジェクト役員 潘珍珍
6 月 14 日	上海市甘泉外国語中学校	上海市甘泉外国語中学校 副校長(対外国際交流) 陳旄旄
		上海市甘泉外国語中学校 外国学生部 主任 張 婷
		上海市甘泉外国語中学校 課程教学部 副主任 郭侃亮
		上海市甘泉外国語中学校 日本語学科 学科長 呉 昕
		上海市甘泉外国語中学校 日本語教員代表 穆旭明
		在上海日本国総領事館 領事 高岡 智子

あいさつ(記念品贈呈)担当

日にち	訪問場所	担当者
6月10日	北京市東交民巷小学校	A-01 高橋 勝也
	中国教育部	A-13 荒井 忠行
6月11日	昆明市書林第一小学校	B-01 川崎 由美子
	昆明市芳草地国際学校	B-07 下地 徹
6月12日	石林民族中学	B-08 寺阪 多江
6月13日	昆明市盲啞学校	A-06 大野 優子
	雲南省教育庁	A-08 小野寺 裕史
6月14日	上海市甘泉外国語中学校	A-04 岩井 香奈

記録係(担当箇所)

日にち	訪問場所	Aグループ	Bグループ
6月09日	天壇公園	A-03 井田 志帆	B-09 藤田 友記
6月10日	北京市東交民巷小学校	A-09 熊谷 茂之	B-05 昆野 玄
	中国教育部	A-02 赤松 潤子	B-07 下地 徹
6月11日	昆明市書林第一小学校	A-07 尾形 順子	B-04 梅枝 駿
	昆明市芳草地国際学校	A-08 小野寺 裕史	B-05 昆野 玄
6月12日	石林民族中学	A-03 井田 志帆	B-09 藤田 友記
	石林での文化体験	A-09 熊谷 茂之	B-08 寺阪 多江
6月13日	昆明市盲啞学校	A-02 赤松 潤子	B-06 笹村 洋子
	雲南省教育庁	A-07 尾形 順子	B-04 梅枝 駿
6月14日	上海市甘泉外国語中学校	A-03 井田 志帆	B-07 下地 徹
	東方明珠	A-09 熊谷 茂之	B-06 笹村 洋子
6月15日	川沙老街	A-09 熊谷 茂之	B-08 寺阪 多江
	まとめ役	A-03 井田 志帆	B-04 梅枝 駿

教育部



雲南省教育厅



学校訪問①



北京市東交民巷小学校



昆明市書林第一小学校



昆明市芳草地國際學校

学校訪問②



石林民族中学



昆明市盲哑学校



上海市甘泉外国語中學校

文化体験・その他



これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003年3月2日～8日	北京市、浙江省杭州市、上海市	12名
2004年4月25日～5月2日	北京市、天津市、遼寧省大連市	15名
2005年5月22日～29日	北京市、新疆ウイグル自治区烏魯木斉市、上海市	14名
2006年5月21日～28日	陝西省西安市、天津市、北京市	14名
2007年5月20日～27日	北京市、海南省（海口市、三亜市）、上海市	22名
2008年6月15日～22日	北京市、青海省、上海市	22名
2009年6月21日～28日	北京市、内蒙古自治区（呼和浩特市、包頭市）、上海市	25名
2010年5月30日～6月6日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	25名
2011年5月29日～6月5日	北京市、湖南省長沙市、上海市	25名
2012年5月27日～6月3日	北京市、内蒙古自治区呼和浩特市	25名
2013年6月23日～29日	北京市、甘肅省蘭州市	25名
2014年5月18日～25日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	50名 2012-2013年枠:21名 2013-2014年枠:29名
2015年5月24日～31日	北京市、広西チワン族自治区（南寧市、桂林市）、上海市	25名
2016年6月12日～19日	北京市、寧夏回族自治区（銀川市）、上海市	25名
2017年5月16日～23日	北京市、安徽省合肥市、上海市	25名
2018年6月3日～9日	北京市、甘肅省蘭州市、上海市	25名
2019年6月9日～15日	北京市、雲南省昆明市、上海市	25名

計 399名

※ 2003年度から2017年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018年度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営している。

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

2020 年 1 月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

©2020 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)